

御處置無之は不相濟必竟周布中村等も俗論百出に苦しく對各位候も一々不相濟事のみには御座候其中模様も有之候は、逐一御聞せ可被下候奉復

御覽後御火中

允

江月老兄内拜復

（江月は久坂玄瑞）

嗚々御まぢ被成候半と奉存候弟もこゝろせき候得共

儲公今以御退出無之御隙取候得はいよゝゝ掛念奉り

御歸邸被遊候を奉窺不申は外出難相成候間千々萬々殘念には奉存候得

ども今晚之淀舟え御乗り被成候思召ともに御座候は、何卒無御容赦御立

可被成候其中

御歸邸被遊格別御様子無之候得は行歩旁御尋仕見可申候自然拜顔不得仕

候は、暫時御別れ申候道中別御自愛第一に奉存候勿々頓首拜

十六日

尙々小幡も腹瀉と歎申事に御座候拜

草山老臺座下

松菊生

（小幡は小幡彦七）  
（草山は來島又兵衛なり）  
（下文は周布政之助自筆なり）

ふくり申候とふそゝ早く殿様のお顔をお見あけなされてそれから我事をもひ出して下さいましよ來しひさまは明日の朝までとめおきますから必々早々々々々

度々御投書一に奉拜誦候おし付罷出拜顔可仕と奉存候弟も元より長滯京仕候心得は毛頭無之掛念之廉々早々相運ひ置候得ば生外に遺憾無之候間其始抹相つけ候所存に御座候就は兎に角一應拜話仕候心得御座候暫時御見合可被遣候尤御轉席ども之思召御座候は、しなえ被仰置候様奉頼候勿々奉復

乃（七月十六日カ）

木戸孝允文書卷二（文久二年七月）



儲公にも追付 御歸邸と奉存候

草山 様内奉復

松菊生

(草山は來島又兵衛)

明朝まで御待申上候間御用濟之上今一應拜眉願度候以上

則

○

(彦七は小幡彦七)

右に付ては於其元薩藩大久保市藏堀次郎其外へ御自分様彦七間御相對相成前段之次第云々且又右に付ては殿様若殿様御間朝廷よりの御沙汰次第早々御出府御盡力御周旋御内治定に被爲在候間其節は諸事厚く可被仰合候間何分無腹藏申論候様有之度候段入々被仰合被置候様にと存候

七月十六日

(此書は木戸孝九等より來島又兵衛に贈れるものなり)

○

拜啓

(益田彈正浦朝貞)

御兩殿様益御機嫌克被遊御座御互に奉恐悅候將又老兄御壯榮に御忠勤奉大賀候借過る六日被遊 御發駕候に就るは弟も無間御備の罷出候心得に御座候所御供人數之中殊の外流行相煩稽古人數も五十余人之内無事之もの纔九人御徒士も且々御供仕候もの三人位に余り人數減少に相成候間不得止御滞留も有之其上御行程も余程相縮候に付昨廿日木曾馬込之驛迄罷出候の漸御備を拜し申候左候の御泊宿中津川の引返し彈正殿鞞負殿侍御政府之面々にも面會仕京都之御様子委曲申陳し候所少々は於江戸も勅使御下向に就るは

御内勅之旨も被爲蒙候儀に付 御發駕いかゝ可有之哉と申議論も有之候様子に御座候得共其議終に徹底不仕別に御議論も無之只謗詞御訖先達る之御内旨之趣のみにあ

御上洛と相成候様御決着に 御發駕被爲在候御事故格別 朝廷に御伺被爲成候儀も無之御様子就るは於御地御同様に御議論申居候通



御上洛之上御處置如何被爲成候可然哉元より於爰元も定論は無之様子に被相察申候其上麻田翁も未着故諸事決斷乏敷其中今日も明日もと相過候事故隨萬事稽延に相成舉る麻田參り候を相待居候のみに御座候弟も今朝

（長雅は長井雅樂）

御前に被召出候に付京都之御模様見聞之儘逐一申上長雅内造於京都之始末も無殘所申上縮る所長雅等之事御氷解不被遊候は往々御誠意徹上之程乍恐無覺束奉存候と見込之處無腹臆吐露仕候明日も此驛御滯留に付何とか其中には御評議も相決し可申候間御様子次第御先は罷歸可申候得とも兎に角麻田參り不申分には御一決と申所如何可有之哉實に如是格別之  
思召も不被爲在御事に候得は  
御内勅も被蒙候御事に付御奉行之上  
勅使御守護に被遊

御上洛 御參内之上是迄之次第逐一 御言上にも格別被仰出候事も不被爲在候得は其上にも 御歸國被遊候御都合に被爲在候と今度之御一事一先始末相着き候故其余之所は御氣着之所實を御督責被爲成候は、さすが一橋老越公之御事故爲天下と相成候事に御座候は、御採用も可被爲成之所格別之

御見込も無之候也

御上洛實に千載之遺憾と奉存候尤此上にも訖度

御上洛之御詮も有之候程之儀出來仕候は、無此上御事に奉存候爰元昨今相伺候勢には其邊之所如何可有之哉掛念千萬奉存候先は爲其申上候閣筆勿々頓首九拜

七月廿一日薄暮

尙々御近所之諸君子に可然御致聲奉願候拜

白水 老兄

小五郎

（白水は中村九郎）



（彈正は益田彈正なり）

一筆致啓達候猪右兵衛嫡子生田市太郎義彈正殿人張之内に於見習として  
彈正殿御番手中御暇被差免江戸罷登候に付此度一同京都に罷登候處留守  
無據差問之趣有之御暇半途之儀には御座候得共御國罷下度段如願被遂御  
許容今日當京都出足罷下候依之例之通御添狀持下り可申之處火急之義故  
爰元御居合は御當役方御印判等相濟候間合無之に付此各様迄申進候様と  
の義に付如是御座候恐惶謹言

七月廿六日

桂 小五郎

中村九郎兵衛

（中島市郎兵衛等皆長藩士なり）

中島市郎兵衛様  
引田新左衛門様

一筆致啓達候 若殿様江戸御着掛け薩邸御立寄之義別紙御伺相濟差出候

間被及 御聞候様御取計可被成候且又先き達る御老中様へ被仰入置候方  
可然与之御事に付別紙之通來島又兵衛迄申越候様にと彈正殿被申付候間  
若殿様伺相濟次第御旅中より早飛脚被差立候様にと存候御式臺飛脚之義  
は明日も程次第暮にも及可申に付御旅中より被差立候方可然に付右様御  
承知御取計可被爲成候爲右得御意候

八月三日

山田宇右衛門

桂 小五郎

中村九郎兵衛

周布政之助

兼重讓藏様

御書面之通別紙旁致承知井上小豊後を以早速 若殿様申上之候處伺之通  
可被仰付与之御事に付被差越候別紙尙御窺書寫とも一封にして飛脚之致  
仕出候間右様御承知彈正殿へも被仰上可被下候恐惶謹言

（兼重讓藏等皆長藩士なり）



八月三日

一筆致啓達候

若殿様此度御出府被遊候付江戸御着掛ケ薩邸の御立寄三郎様の御面會可被遊と之御事に候處素よりは是迄ケ様之御振合も無之且御廻勤をも不被遊内之儀旁幕府に被爲對候は押し付ケ間敷相當候付先き達を御老中様方の御内々被仰入御聞濟之上に御立寄可被遊と之御事に付小幡彦七被仰合別紙之御旨趣厚く相合彦七より早速脇坂板倉御兩家の申上左候を御聞濟之上滿る御泊りの彦七被差出委細及注進候様御取計可被成候此段申進候様彈正殿被申付候間上總殿被仰達候様にと存候恐惶謹言

八月三日

山田宇右衛門

桂 小五郎

中村九郎兵衛

（三郎は薩摩藩島津三郎）

兼重 讓藏

來島又兵衛様

周布政之助

尙々彦七殿の

御泊りの罷出候節薩邸にも乞合置候様可被仰合候以上  
御面書御別紙之御趣委曲致承知候昨十日早天又兵衛薩州高輪邸の参り大久保一藏の致相對 若殿様御着府掛ケ三郎様爲御面會御旅裝儘御立寄被成度段御旅中より申來候由申述候處一藏申候儀御旅裝其儘御立寄之儀此御方におゐては別を御満悦之儀に御座候早速其段三郎様の可申上由左候を御答に御立寄被成候段少も差支り之儀無御座候若御道中御川湊等に御着府御延引之節は於道中致御面會京都より御奉之御用筋をも承り候様子次第には 勅使一同御同道に江戸表に引返歸府可致候御着府御待申度候得共此方には爰元御用相濟候上は一日も早く京都に罷登幕府御奉請之旨可申上都合候間差急儀に御座候由被仰聞候尙



又今朝別紙御書面寫之通御老中様ハ彦七持參委細公用人迄申述置候間  
一兩日之内御聞濟之御沙汰御付紙相整可申候左候得ハ彦七來ル十六日  
頃薩邸ハ參今一應御立寄之儀申談置滿ル御泊ヘ罷出委細御注進可申上  
候此段彈正殿ハ被仰上候様上總殿被申付如此御坐候端書に 勅使大原  
様には來ル廿日御發途島津三郎様には同廿一日御發途御積に御座候  
由八月十一日之裏書を以申來候事

（上總は長  
藩士根來上  
總なり）  
（大原は  
原重徳な  
り）

（世子は長  
藩世子な  
り）

世子は余程御氣遣被遊候也  
御發駕有之候事に付内輪之ものも老兄よく御勘考被成候也何事も御  
差圖可被成候頓首

只今は御投書委細承知仕候弟も晝後は外出仕候に付返答有之候は、御披  
見可被下候老兄には今日御立被成候哉且又今朝之來客いか、之主意に御

座候哉元より疎漏は有之間敷候得共何卒御氣を被付度御事と奉存候是は  
老兄迄内々申上候迄に御座候頓首拜

十日

日下老兄極内

木 圭

（日下は久  
坂玄瑞な  
り）

前略豈不計今日之形勢相成前途難見候得共只々

君上高明正大之思食を奉し誠忠正議をもち詰

神州之爲め必死盡力之外無之

上をうらみ候事は元より無之世間に係り候事も無之乍去列藩正議之士と

は共に

神州之命脈を維持し候爲め

君上御忠誠之

思召に無腹臆吐露一毫も長州之私心なぞと疑を受け候は不相濟候間是



等之處公然に江戸有司へ一と通之被仰越候はいかゞ哉様子次第有志之もの一人遣し候も可然と被考申候其中此御飛脚へ書一符御差出しは可然と奉存候勿々拜

八月念一

松屋老兄御直拆

圭 木

（松屋は村田次郎三郎なり）

過る六日世子君板倉閣老御逢被爲成候節東禪寺一件刺客と夷人との曲直を論候由に付其始末一圓合點に入不申必竟閣老は井伊安藤當職比よりの時勢へ着眼被致候故ケ様の説出る事と被相察癸丑甲寅頃よりの事情得と御參考有之候得ば必ず異論は有之間敷たとへ此上何と被申候とも決して難被折合公明正大の叡慮相貫不申候ては不相成一體東禪寺一件の面々は全く夷人と曲直を争ひ候心底は毛頭有之間敷違勅を憤り眞の叡慮を奉じ候て攘夷と着眼致候心底は必ず幕吏と曲直を相争候事にて可有之乍恐叡

（淺野は大目付淺野伊賀守氏祐なり）

慮も其所を御推量御愛憐被思召御事と奉存候此段山田安五郎へも相論可申と存兩三度相尋候處折悪敷兎角駈違ひ候に付中根鞞負へ面會致し右之趣委細相論じ且つ關西關東の事情大に相違致し五六年前は幕吏の罪を糺し候位の議論に有之候處今日の勢専ら徳川氏の罪を相糺し不申ては所詮御國威御挽回被申儀は無覺束と論じ且又姓名は不相知強て御不審に候はゞ小五郎と被仰掛候ても不苦候得共爲御心得入御一覽度存候と申平野次郎四月の内奏を相見せ候處決して嫌疑は無之に付爲心得是非春嶽公へ一見致させ度候との儀に付春嶽公へも入御覽候其後春嶽より被仰越候に付大監察淺野へも致面會右の通り申陳候尤も平野内奏は見せ不申總て關西有志の論は右云々の儀に付君臣の義を明かにし上下の分を御正し正眞實着に叡慮御遵奉無之候ては所詮天下之人心折合間敷と申置候淺野輩は少々氣も付居候様と相考候へ共數百の俗吏心術一新致候事中々容易に無之速に正邪の辨分明に相立不申ては兎に角人心の方向不相定此儀も追々迫



り込候へども俄に不相運近日被仰出候儀有之候様子に被相窺候へば愉快と申程の儀は有之間敷井伊間部を始め安藤酒井を一層屹度嚴罰無之ては不相成候今度會津上京の處尤も大任にて京都の儀悉く致總括全く大所司代に有之候就ては自然酒井の轍を蹈み候ては忽ち天下四分五裂土崩瓦解の勢申迄も無之に付會藩へも上國の形勢可申聞と存候處春嶽公より會候へ御尊有之候様子にて會藩の者御屋敷へ罷出候間眞に叡慮を被奉安思召に御座候は、是非御立前正邪の辨を御正し無之候ては所詮天下の人心安堵不仕折角御上京被爲成候ても一通りの幕吏上京と相心得其所詮有之間敷段をも相論候處至極同意にて會藩にても追々幕府へ張込候由に御座候何卒徹底仕かしと存候御上洛論世間の見込いかゞに候哉の段も春嶽公中根を以て御尋有之候に付世間有志の者の見込にては幕威を輦轂の下に振ひ朝威を撓せ候例の幕吏の點詐權謀にて可有之と甚危懼致居候自然萬一ヶ様の次第にては御上洛を建白仕候者迄天下之申譯無之趣をも申上置其

後中根より承り候へば春嶽公御嘶に是迄實に關東の處置にては何と被疑候ても理解難相成現場にて名分御立被成候の外有之間敷と御申相成候由御上洛論會津よりもせり立て候歟に被察申候來春中にも相運び可申歟是非此度の御上洛は海上にて有之候へば無此上事と存候越へも屢論込候處春嶽にも元より左様被爲成度御存意に有之由相聞候へ共何分にも幕吏のしらべ埒明不申候様相見候是非とも海上に仕らせ度盡力此時と存候且又京都町奉行禁裏付武家朝廷を輕蔑致候趣も逐一春嶽公入御聞候様中根迄相咄候處春嶽公仰に幕吏より第一に朝廷を尊戴不仕ては不相成の處今以是等舊習有之ては不相濟儀に付於越邸面會京都の事情逐一説得致し吳候様との儀に付先日竹内同道可罷越と存居候處折柄永井内輪俄に流行病人有之斷り來り候間其儘延引相成居候

八月十三日

(竹内は竹内正兵衛)  
(永井は永井芝蕃頭尙志か)

(此書は木戸孝元が京都在勤の長藩同僚に贈りたるものなり)

木戸孝元文書卷二 (文久二年八月)



（三郎は島津三郎）

（世子君は長藩世子なり）

江戸立飛脚藤枝御泊に罷出候に付ては其以後江府の御模様も疾く御承知可被成今日岡部鞠子の間に薩州飛脚にも面會仕候處三郎様にも彌二十一日御發駕の御様子勅使御立は二十日とか申説有之未だ屹度相分り兼申候自然彌二十日の御立に相成候は是非乍御無理十九日に御着府被遊候て直に勅使へ御面會被遊候方御都合可然と奉存候尤私御先へ罷越候付委細の御様子は勅使にも拜謁仕薩邸へも参り候て滿る御泊にも罷出委曲可申上と奉存候相成事に御座候得ば是非勅使今少々御立御猶豫被爲成二通勅諭の御旨趣貫徹仕候處御見届にて御立せ奉願度且又薩も同力合身と申上は天下の事今日迄にて止み候と申儀は毛頭無之終に天下公然歸着致し候處尙御互に未自論の處も遂に御吐露不被遊畢竟神州の御爲に被爲叶候御儀肝要之御事に御座候間是非三郎様にも御發駕御延引にて世子君と兩三度は少くとも是非四五度位は御互に御往來被爲成候て御自説をも御双

方御頼被爲成度御儀に付成丈け盡力周旋仕其邊の處貫候様願度奉存候間此段不取敢爲御承知申上候間得と御勘考の上可然御所置奉願候勅使并薩御發駕御延引の處力有り丈何處迄も周旋仕候心得に御座候

八月十三日

（此書は木戸孝九が長藩世子に隨從せる兼重讓藏等に贈れるものなり）

一筆致啓達候

殿様益御機嫌克被遊御滯京

若殿様益御機嫌克順々被遊御旅行恐悅至極に奉存候將又各位彌御壯榮精勤珍重に存候二に亦介小五郎も今日御備え罷出一同無異御供申上候間御放慮可被下候然は過る七日江戸立之飛脚濱松驛到着致し彦七又兵衛數馬より之御用狀致披見候處先達之頃又兵衛共より差越候御用狀之趣は於薩州を

（亦介は山田亦介）



御兩殿様御内速に被遊御出府候御義御待仕居候様大久保市藏ともより相  
嘶候段申來於其御地も九郎兵衛様御承知之通本多彌右衛門藤井良節ども  
にも今日に至り疑念致し居候廉も格別無之様被相察候所今度別番御用狀  
之趣にては近來之模様何とも不審千萬に而俄に箇様相變候義無之筈之處  
いかゞ之次第に可有之哉兎に角  
若殿様御出府前

勅使御立に相成候は自然二通の

勅諭も徹底いかゞ可有御座哉と奉恐案候然處過る四日中山卿小五郎え之

御演説に今度長門守殿二日之

勅諭御請にて御東下に付候は

勅使を滯府被致候様

朝廷より被仰越候との御事に御座候所未其邊之義

勅使御承知無之様被相窺別番中大原卿御演説に

長門守殿下向迄滯府候は談合致し候様

朝廷より被仰越候とは有之候得共二日已前之御事と被相窺二日

勅諭之趣は大原卿一圓御存不被爲成候御様子最早其已後二日之御様子も

朝廷より被仰越候上は大原卿も御滯府と被相窺候得共實に重大之御事に

而且四日小五郎え被仰聞候御演説之趣も有之候に付今一往中山卿え委細

之趣言上被成候は此段急使を以

若殿様御着府迄是非大原卿御滯府被爲成候義被仰越候様被仰上候ははい

かゞ可有御座哉且又大井川も出水に而明日は御越立所詮御六つケ敷就

は御積り之日限を御延に可相成候間今日飛脚差立

若殿様御着府迄御猶餘被成下候様尙又委細之趣彦七を以大原卿え申上候

様被仰付候其中趣次第小五郎義急に御先へ被差越候義も可有之候旁爲可

得貴意如此御座候恐惶謹言

八月十三日

桂 小五郎



桂與一右衛門孝九花押

山田亦介繁社花押

兼重讓久花押

慎藏花押

花押

兼重

宍戸九郎兵衛様  
周布政之助様

山田宇右衛門様

中村九郎兵衛様

〔中村九郎  
兵衛自筆〕

御書面之趣委細致承知彈正殿申達被及  
御聞候二通之

勅諭之義に付御差留之義大原卿え被仰越候様早速中山殿え御頼被仰入候  
處二日後早速御沙汰被仰越候付頃日は既に御承知に相成居候段被仰聞候  
付此余猶又被仰越候様にも難申上に付廿日御發程之御様子に候へは何れ

の道御一面談には可被爲及に付右二通

勅諭之義は勿論二事之御周旋方に付亦も重大多端之御事柄容易御片付可  
被成筋無之旁精密根源之御議論有之候は、決而御半途之廉にも可有之哉  
に付是非御引留之御手段可被爲整御事と存候追々彥七其外より申越候趣  
にも橋越兩公奉職勵精追々

朝命尊奉政體一新之御處置可有之と之御見込を以御用濟之譯と

勅使にも被思召定候由に相聞候處

勅諭にも有之候様戎虜の慢を禦き衆人之望に叶ふと申場まで御運ひ付不  
申は

叡慮之御旨貫徹と申譯には有之間敷薩にも右様之半途にて引取と申は  
殘念之事には無之哉然は此度

此御方御窺定之通二事之

勅諭を大眼目にして戊午之御沙汰に戻り六ヶ條之事務一に舉り候目途屹



と相立度御事と奉存候彦七其外には承知無之事に付論詰に不及段も無余義候へ共各様御着之上は委曲

若殿様へも被仰上屹と御取締御引留可被成候義無御疎と奉察安心罷居申候乍爾

勅使并薩州にも數日之滯府傳奏屋敷御會議も兩度におよひ巨細之趣は不相分候得共

朝廷并薩藩人より承り候も兩度之御會議にて大抵諸事運ひも付候由申來候との事に付二事六ヶ條も最早

此御方被着御手を候には不及様御運付候哉も難計左様に候へは神州之大慶福無此上御事被爲於

此御方に達る御功名を被爲貪候譯は更に無御座其段申進候迄も無之各様にも疾御心得之御事に付二通

勅諭之御用筋のみ尖に相運候様被遊御盡力候も可然御事に御座候猶又薩

人不平之趣は定る來島入込不足之氣味も可有之哉元より詭秘權詐之義は持前にて本田共るは少々不滿之事は毎々有之申候得共只今差合候程之事は無之様被相考候乍爾藤井良説着各様御談合之上如何様之趣有之候共氷解に可至と存候間彼方持前には不拘

此御方には正大雄拔を旨とし迂疎狹小之弊に流れぬ様萬端御取計方肝要に存候

一周布氏虐疾は追々平愈之處引續痔疾差發り只様出足延引相成嘸々可被成御待と存候得共不任心底候今五六日も立候は、且々出足可相成哉と存候

一前田孫右衛門過る十三日京着今日御直目付役奉命相濟申候

一爰元御發足後は少も無相變義近々の内岩倉其外罪狀相決候由風説有之儘成義不相分新諸司代も冷々よし可賀之事に御座候

右之廉御答旁取紛草々得貴意候恐惶謹言



八月廿日

中村九郎

平清花押

山田宇右衛門

頼花押

宍戸九郎兵衛

眞徴花押

山田亦介様

桂小五郎様

亂筆御推讀

（茂才助は薩摩藩五代才助なり）

今酉之半刻金谷驛到着仕候に付直に薩藩茂才助在留相尋候處滯泊致し居候由に付相尋面會仕只今八つ時過にも相成候歟五つ時より種々談話仕三郎様御發駕等之處も委細相尋候處一圓承知不仕過る九日弟吉田驛に薩藩牧兵助と歟申姓名相認有之候荷物見受候に付才助にも御承知に候哉と相尋候處才助は荒井驛手前に在行違候處其折柄輿中に眠り居其後下人より承知致し候に付荒井之定宿に在相尋候處定宿亭主曰牧兵助と被仰候

得共御供方より承り候得は御本名に在無之よし申居才助も牧兵助と申ものは兼る姓名も承知不仕故只今迄も不審に相考候と申候處弟今日着直様問屋場承り合せ候處堀小太郎と申先觸は一向不相見薩藩に在過る六日立牧兵助と申先觸のみ有之候付始る堀の變名に可有之哉と考付候間茂へも右之趣相嘶候處彼も右様之御心當り有之候得は堀に在可有之も難計と申居候就るは急便此段京都えも被仰越候方御都合可然と奉存候何れの道京都えは立寄候義と被相考申候且其節定宿之亭主人之嘶とて三郎様にも十五日頃御發駕に相成候由茂え語り候と申事に御座候然處今晚當驛え大坂より三郎様御伺に參り候人夫とて五十人程止宿仕候よし其ものとも之話に三郎様は今度木曾路御登りに相成候と申候由茂之下人承り歸候趣茂より相話申候且又茂今一説承り候には十七日廿一日兩日中に御發駕に相成候歟之様子も定宿傳聞仕候を相嘶候事に付屹度御嘶仕候譯には參り兼候得共茂見込も右兩日中に可有之と申候就るは茂是非同道仕候を出府



仕直に薩邸え誘引可仕よし申に付明朝より同行仕候覺悟に御座候十四日  
三島驛十五日藤澤驛十六日晝着府と相積り申候今日迄之次第逐一吐露仕  
候處茂大に同意之趣に付委細之次第小松中山大久保等えも相談し屹度三  
郎様御承知被成候様周旋仕度段申居申候兎に角出府仕候上に無之は分  
明には申上兼候へ共今晚之都合荒方申上度爲其如此御座候已上

八月十三日夜半

小五郎

（兼重讓藏  
山田亦介）

讓藏様  
亦介様

尙々十五日御立に候得は無是非事に御座候へ共未御立無之内着仕候は  
、何卒

世子君御着迄是非御猶餘相願度義と奉存候以上

（備前は安  
戸備前）

日々秋冷に差向候處先以備前様益御勇健御旅行被爲成恐悦之至に奉存候

將又貴所様彌御安泰御供爲成珍重之儀奉存候其已後は御當地も都合御靜  
謐に御座候且又先日御送り申上候御掛物御用に相立候哉不見合千萬に  
奉恐入候此段よろしく御序之節被仰上可被下候御屋敷中も御立已後  
誠に寂寥に一入秋景を覺申候且又少々風説之儀奉申上候間早速御差出  
相成候様可然御取計奉願上候御惣體様へ可然乍失敬御致聲奉願上候御飛  
脚只今出足仕候故乍失敬一亂筆奉捧候其中時下御自愛第一に奉存候餘は  
後便可申上候勿々頓首拜

八月廿四日夜

彦兵衛様

小五郎

（有馬彦兵  
衛）

御手紙拜見仕候骸一件は來翁より齋頭もよひ出さる候を委細相頼上候都  
合に相成候

（來翁は來  
島又兵衛）



御紋服は御取上ケ可被成候新規にはかへ候カ差遣候筈なれども間に合不  
申に付此一投カ來翁出し申候不足之分は古手なりとも御求め被成候カ御渡  
し可被成候差向の事故一往かなりに御仕切置に成りていか様とも可相成  
候奉復

念九

木 圭

（久坂玄瑞）

久坂 様拜復

（良藏は來  
原良藏）

一筆致啓上候然カ良藏様御事過る廿五日御出府被成其后追々御面會も仕  
候得共差たる御氣色無之様相考居候處兼カ御處存も有之歟被相察昨廿九  
日不圖次第にカ御死去何共絶言語驚入候次第に御坐候此左右被聞召候は  
御滿堂様御愁傷實に奉推察候於私も十方にくれ諸事不行届而已に御坐  
候處折柄今度佐世八十郎も出府に相成兼カ御間柄の義にも有之候に付乍  
不及御相談に預り御死後御作廻等仕候寺は清岸院へ相願前后の御様子難

（俊輔は伊  
藤俊輔な  
り）

盡筆紙候處折柄今度俊輔御飛脚にて罷歸候間委細申含且此者は浦賀長崎  
等にも御手に付居御出府以后も度々御固屋えも罷出御様子も相伺居候  
に付早速歸着上は差出候カ可申上様申聞せ候間御承知可被遣候御髮カ鬢は  
御家來平藏に守護爲致俊輔同道にて差歸し何とも難御堪次第幾曲も残念  
の至りに奉存候御序の節御滿堂様御悔の程御傳言乍失敬奉願上候何分  
も不行届勝にも恐入候偏に御高許可被下候先は御悔可得貴意如此に御坐  
候恐惶謹言

八月晦日

桂 小五郎

花押

來原良左衛門様

（來原良左  
衛門は良藏  
の養父な  
り）

一筆致啓達候今日御使水野和泉守様を以水戸中納言様カ別紙之通御達相  
成



勅諭先一廉は貫徹仕重疊之御事奉存候其余之儀も速に貫徹仕候様精々御盡力御迫立相成候に付あは昨日小幡彦七板倉周防守様被招呼御運ひ方之儀廉々御尋有之候間明日

若殿様板倉様御相對被遊候筈に付當日御應接之御都合は後便可得御意候いつれ此御儀は列藩いも御沙汰有之細密御調無之あは折角之い御慮徹下不仕儀に付多少之御手間取も可有之と存候此段各様迄得御意候様鞞負殿被申付候間彈正殿被仰上候様にと存候恐惶謹言

閏八月四日

桂 小五郎

山田 亦介

竹内正兵衛

宍戸九郎兵衛様

周布政之助様

山田宇右衛門様

中村九郎様

一筆致啓達候

今日御使水野和泉守様を以水戸中納言様い別紙之通御達相成一通之

勅諭先貫徹仕重疊之御事に奉存候其余之儀も一通之

勅諭速に貫徹不仕仕候は不相成に付精々御盡力御迫立相成候得共にいつれ此

御儀は列藩いも御沙汰有之細密御調無之あは不相成儀に付多少之御手間

取も可有之と奉存候と存候此段各様迄得御意候様鞞負殿被申付候間彈正殿被

仰上候様にと存候恐惶謹言其如此御座候以上

尙々今一通之

勅諭に付昨日小幡彦七板倉周防守様被招呼御運ひ方之儀廉々御尋有之候に就あは明日

若殿様板倉様御相對被遊候候に付當日御應接之趣は後便可得御意候已

(初頁は浦  
鞞負彈正は  
益田彈正)



上（報告書の草案なり）

○  
過る四日御用番板倉周防守様より小幡彦七御呼出に付罷出候處御退出掛被召出御直に先達御差出相成候

勅諭之内御取扱方の義別紙之通廉々御尋有之候に付其段長門守へ申聞何分の御答可申上段申演罷歸申上候に付翌五日御用掛の者共一同被召出御答振會議被仰付

若殿様御出御直答可被遊の處廉々入組候に付御口上御手扣の振に相調強御所望有之候は、御渡可被成に相決別紙尙餘意御合を以可被仰入廉々をも認被仰付候

同六日朝

御登城前板倉へ御出被及御談判候處都合御答振の廉格別御異義は無之相見候得共兎角坂下之事御氣懸りの體に相見猶東禪寺一件甚六ヶ敷異

人との曲直を御論被成候に付形は違候共志の處は櫻田坂下等と格別違は無之と相考居候に付篤と御熟考相成候様被及御答御歸殿後尙又委細に致議論見候様被仰付再三會議にも及び候處

若殿様板倉候へ御答の通形の上には異人と曲直も有之候へ共心志を論候節は全以違勅調印より起りたる事に幕吏と曲直を争ひ候譯に付是等の入割書取を以委細に辨解不相成候付小幡彦七并小五郎等中根鞞負山田安五郎等直對の上理解被仰付猶又小五郎事淺野伊賀守殿御相對の節も右の譯申入置候

一伏水一舉御文面御除之義於其御地逐々被仰立も有之由御尤に存候乍去於爰許も公儀御關係無之部は普く列藩へ御沙汰相成候様被仰入候義に付薩にさへ篤と落着いたし候得は遺脱は無之譯に付能々薩人御說得相成候得かしと奉存候

一餘意五廉の義いつれも後來の御案思有之被仰入置候第一條は水戸其外



薩藩の義迄も無遺漏御吟味有之度ために態と御張込被爲成置候第二條は水府其外の人數於下詮義申合のため其口を開らき被爲置第三條は事の大小となく御内談有之度其節は於爰元成丈け公私正邪之判斷を以被仰立度餘地を明置れ候譯に御座候第四條は未 勅諭御遵奉の御答も無之前日御贈官の御達も無之に付御詮義振御詰問可相成張本第五條は前日板倉侯より小彦へ官家方御答有之たる由いか様なる譯に候歟聞入たる義は無之候哉と御尋有之候處彦七未だ承知不仕以前に付格別御答にも不及罷歸り候に付御文面の内酒井若狹守奸謀に與し候歟云々と申譯被仰入置候は、後來罰條の被仰立にも御益に可相成との御事に付能々御考味可被下候

一同七日小彦事中根鞆負へ致相對一昨日は水戸御贈官并遺志御繼述之御沙汰被仰出候由長門守様被成御承知御大慶に被思召候然處長門守様此度の御歸府は全く御印封の御沙汰書を御言傳に御持參被成候譯に

は無之乍恐重き 勅諭之旨被仰蒙於營中 公方様へ御直にも被差出候程の義に御座候處未だ御遵奉有無の御沙汰も無之水府御贈官の義被仰出候も別に御達と申義も無之是等の趣は世評を承り京都へ報知も不相成甚差間罷居其上御次第も不相立様に奉存候如何様の御調に相成居候御都合に御座候哉御内々承繕見候様被仰付候段申述候處早速春岳様へ申上御答に委細被成御承知候是等の義は閣老方引請の事に付委細に板倉へ申入候様との御事に付及相答尙又先達を長門守様よりも御相談被仰入置候 勅答被仰出候節取計方如何仕可然哉と相尋候處中根申分に於御内輪に御取調御治定の處被仰聞度と申に付未だ治定と申義も無之候得共内々の調は 勅書の義御直に被差上候事に付定 御答も御直に可被仰出其節は長門守様直に御上京御復命をも可被成哉に相見候處元來此度の御歸府は萬端御心配被成御遵奉の廉々御見据の上御復命可被成其内は大膳様御滯京の事に付此方より申上す一々於京都言上相



成候筋と相考居候段申演候處至極御尤に存候其段可申上置と申事に付罷歸り候同八日朝板倉様罷出前斷の趣逐一に公用人を以申上尙春岳様へも御内々申上置候段申演候處御答に被仰入候趣致承知廉々不行届の義有之御尤に存候 勅答の義は何分取調可及御答候此後御沙汰相成候義は度々其役座呼出可致御達候尙又一昨日御贈官の義は水戸家の事に付其役座呼出し達候は倉略に當り長門守殿態々御呼出の上御達と申も如何と存候内期延に相成幸昨日御出に致御相對其段及御話候事に付御直達の道理に御引請相成候様にとの御事に付其段可申聞と御請仕罷歸り候

一同十日御用番板倉様より明十一日御用有之 若殿様被成御登 城候様申來大和彌八郎罷出明日の御用筋は如何様の義に御座候哉 勅答とも被仰出候哉御内々相伺候處必 勅答と申譯には無之御差出の 勅諚に付御用有之候との御事に御用筋儘に不相知に付明曉越前板倉今一應

御開合可相成哉との事に御座候處根の御議論さへ相決居候得は事々敷御開合にも被及間敷凡そ明日の御用は逐々御せり込相成候 御答餘り遅々に相成候故閣老方より御遵奉相成候段一應の御達共には無之哉何分共營中に御應答振會議被仰付可然との御事に十一日朝六ツ時揃に御登城前いつれも被召出廉書を以精密に御議定被遊五ツ半時御登 城七ツ時 御歸殿直様御用懸りの者被召出今日の御都合被仰聞候

一營中に御待合被遊候内大目付淺野伊賀守御相對に付今日の御用筋御聞合被遊候處未年と申事に付閣老方聞合吳候様被成御頼候處頼る御達振の様子内々移り有之猶此間桂小五郎被差越京都并西國邊の事情委敷承之大慶仕候猶逐々面談仕度に付被差越被下候様被申演候由 一當日閣老方御用繁の様子に八ツ半時頃一橋卿春岳様閣老方御列座に御相對一橋卿被仰聞候は此度被仰上候 勅諚の旨御遵奉可被爲在候



得共向々取調被仰付置右相濟候上 御直答も可被仰出の處餘り御延引相成候故其段各より一先及御達置候との御事に付御達の趣委細承知仕候其段京都へ可申上候過る五日水戸御贈官并遺志御繼述の御沙汰早々被仰出京都においても御満悦可被 思食次に大膳大夫并於私にも大慶仕候此餘は御取調次第冤罪の者御赦宥の義尙列藩への御沙汰早々相運候様仕度奉願候段被仰演候由

一御上洛の義如何様に御取調相成居候哉と被遊御尋候處一橋卿御答に精々御差急に候得共未たいつ頃と治定いたし候程には運兼候由被仰聞候由

一板倉様より此間の御達事旁甚不行届に有之以來は御遵奉の度々御家來呼出可致御達と御挨拶有之いつれも御立除被成候後へ春岳様御居残り左の廉御寛話有之候由

一勅諭御遵奉事も精々無疎取調候間左様御承知被下度尙先程御尋の御上

洛事未た御他言は被下間敷春岳心得にゐは是非共來春と心積りに有之段被仰聞候に付 若殿様御答に御上洛一件は何卒被爲差急奉宸襟萬民安堵仕候様御處置被爲在度御事に候乍去名分を明らかに被爲成候義肝要と存候段被仰入候處春岳様名分とは如何哉と御尋に付 君臣の道を立上下の分を明らかに不致候ゐは乍憚御上洛も其御詮無之事と存候段被仰入候處御尤に存候段御答有之其餘は事情の御話に移り京都邊の形勢御聞取の義も有之候は、何卒御報知被下度尙桂小五郎より西國邊の人氣時情等承之致大慶候今日は屋敷致拜領近々上屋敷へ引移御近邊の事に付從是も參上可致に付登城前にゐも不苦候時々御出御示談仕度と至極御懇に御挨拶有之畢る御退出被遊候由被仰聞候  
前斷の通夜白被籠 御精神御駈引被遊候故自然と御誠意内外に相徹萬端御運方宜敷寔以難有御事に御座候是等の趣報知仕候様鞞負殿被申付如是御座候此段彈正殿へ被仰上候様にと存候由



（此書は木戸孝九竹内正兵衛山田亦介が文久二年閏八月十三日江戸より京都の同僚（戸九郎兵衛周布政之助來島又兵衛山田宇右衛門中村九郎兵衛に贈りたるものなり）

拜啓

各老臺彌御壯榮に御忠勤奉賀候爰元近情逐々諸彦より御承知と奉存候一對州より今度有志之士四十一人出府其旨趣々四十年前より正邪相分れ御國政不相立之處昨年魯夷渡來以來益江戸家老全權佐須伊織専ら閣老安藤對馬守と相結ひ窃轉國等之事も相謀り其上世子に可被爲直善之丞様を廢し候等之姦計差向猶豫致し置候は如何之變動に立至り候哉も難被圖候付右四十一人決心致候は國元出足先月廿三日四日五日とに追々著仕五日之夜佐須を詰問致し姦謀を逐一相糺し候處致自殺候と申事には御坐候得其實は致刺殺候に相違無之様子に相聞申候就は右有志之者も逐々罷越候に付主趣段々相尋候處必竟社稷を重する之論に善之丞様御張出被爲成速に御家督をも被爲繼姦物を拂蕩致し御國政を復

し候様仕度就は中々内輪之力のみに容易に難相調義に付御當家を御依頼申上候は相果し度心願と被相察申候爲

官武御周旋被遊候に付は爲天下孰れ之處にも正を擧げ邪を御拂被爲成候

思召に候間對州之義は御親戚と云殊更に誠忠之者御助力被爲遊御國內正に歸し候様御處置無之は相濟間敷乍然事柄不容易義に付由來能々承知仕正眞之件々分明に相知候は、早速申上候様可仕候右有志之者願に不得止家老之者一兩度罷越清水面會も有之候得共樂々底徹不仕今日も罷越候由に付今日は浦大夫も面會被致以來は有志之者も同伴致し候様にと被申置候都合に付其中委細相分り可申候

今曉對州家老浦大夫に面談之次第承り候得は有志之者申分とは大に相違致し其上有志之者同伴も對國元仕かたき段申候由左様之都合に、は中々尋常に治り申間敷委細後便様子相分次第可申上候



一過る六日

世子君板倉閣老の御逢被爲成候節東禪寺一件刺客と夷人との曲直を被論候由に付其始末一圓合點に入不申必竟閣老井伊安藤當職頃より之時勢へのみ著眼爲致候故ケ様之說出候事と被相察癸丑甲寅頃より之事情得と御考察有之候得はたとへ此上何と被申候とも決る難被折合高明正大之

叡慮相貫き不申は不相成一體東禪寺一件之面々は全夷人と曲直を争ひ候心底は毛頭有之間敷違

勅を憤り眞之

叡慮を奉し候は攘夷を著眼致し候心底は必幕吏と曲直を相争ひ候事に可可有之乍恐

叡慮も其所を御推量御思食御事と奉存候に付此段山田安五郎にも相論可申と存兩三度相尋候處折悪敷兎角駈違ひ候に付中根鞞負の面會致し

右之趣委細相談し且關西關東之事情大に相違致し五六年前は幕吏之罪を糺し候位之議談に有之候處今日之勢専ら徳川氏之罪を相糺し不申は所詮御國威御挽回と申義は無覺束と談し居候段且又姓名は不相知強も御不審に候は、小五郎と被仰掛候も不苦候得共爲御心得入御一覽度存候と申平野次郎四月之内奏を相見せ候處決る嫌疑は無之に付爲心得是非春嶽の一见致させ度と申に付春嶽公にも入御一见申候其後春嶽公より被仰越候に付大監察淺野にも致面會右之通申陳候尤平井内奏は見せ不申總る關西有志之談は右云々之議に付君臣之儀を明にし上下之分を御正し正眞實着に

叡慮御遵奉無之は所詮天下之人心折合申間敷と申置候淺野輩は少々氣も付居候様被相考候得共數多之俗吏心實一新致し候事中々容易に無之速に正邪之辨分明に相立不申は兎に角人之方向不相定此義も逐々迫込候得共俄に不相運候近日被仰出候儀も有之候様子に被窺候得共愉



快と申ほどの義は有之間敷井伊間部を始安藤酒井と一層屹度殿罪無之  
ゝは不相成候今度會津上京之處尤大任に付京師之義悉く致總括全大所  
司代に有之候就ゝは自然酒井之轍を踏み候ゝは忽ち天下四分五裂土崩  
瓦解之勢申迄も無之に付會藩ゝも上國之形勢可申聞と存候處春嶽公よ  
り會公の御噂有之候様子にゝ會藩之者御屋敷の罷越候間眞に  
叡慮を被奉安候思召に御座候は、是非御立前正邪之辨等御正し無之ゝ  
は所詮天下之人心安堵不仕折角御上京被爲成候共一通之幕吏上京と相  
心得其詮有之間敷段をも相論し候處至極同意にゝ會藩よりも逐々幕の  
張込み候由に御坐候何卒徹底仕りしと存申候御上洛論世間之見込如何  
哉之段も春嶽公中根を以御尋有之候に付世間有志之者見込にゝは幕威  
を 鞏固之下に振ひ  
朝威を撓ませ候例之幕吏之黠詐權謀にゝ可有之と甚危懼致し居申候自  
然萬一ケ様之次第にゝは御上洛を建白仕候者迄天下の申分無之趣をも

申上置其以後中根より承り候得は春嶽公御断に是迄實に關東之所致に  
ゝは何と被疑候ゝも理解難相成現場にゝ名分御立被成候之外有之間敷  
と御申被成候由御上洛論會津よりも世り立候歟に被察申候春中には相  
運可申歟是非此度之御上洛は海上にゝ有之候得は無此上事と存越ゝも  
屢々論込候處春岳公にも元より左様被爲成度御存意に有之候由に相聞  
候得共何分にも幕吏之調らへ埒も明き不申候様相見申候是非共海上に  
仕らせ度盡力此時存申候且又京都町奉行禁裏附武家 朝廷を輕蔑致し  
候趣も逐一春岳公入御聞候様中根迄相咄候處春岳公仰に幕吏より第一  
に

朝廷を尊戴不仕ゝ者不相成之處今以是等之舊習有之ゝは不相濟義に付  
此度永井玄蕃京都町奉行被命候に付於越邸面會京都之事情逐一説得致  
し吳候様との義に付先日竹内同道可罷越候存居候處折柄永井内輪俄に  
流行病人有之断り來り候間其儘延引に相成居申候京都に於て幕吏舊習



之廉々森孫六輩之姦徒姓名等被仰越候は、此段委細申込罪度候間後便御承知之件々御知せ可被遣候先は右爲可申陳奉呈候頓首再拜

閏月十三日

小五郎

尙々

勅諭一件に就る種々御配慮奉遠察候伏見暴舉偏に長州之術中より出之候此度伏水一舉赦免も長州より之建白に  
勅諭中の相加終には三郎殿面目を失ひ候様相謀り候歟と三郎殿供從一建中大に疑ひを生し居候者も間々有之候趣に相聞此段御注意可被成候尤藤井良節も最初は伏水暴舉同様に長州術中より出候歟とも疑ひ居候得共疾く氷解致し候に付此度御赦免論か格別疑居候様には被察不申候得共前條之行掛りも有之候事に付於  
叡慮は伏水徒も櫻田坂下之輩同様偏に爲天下可除姦と存詰候心底に付其心を

(尖戸九郎兵衛等皆長藩の士なり)

御愛憐に被

思食候

御旨趣に付此段得と可申論と存候處兩三日之事に其意を不得盡其以後も伏水疑念之談嶋津淡路守様家中よりも粗承り候に付此段申上置候拜

九郎兵衛様

政之助様

又兵衛様

宇右衛門様

九郎様

一筆致啓達候過る十日御月番御老中板倉周防守様より過る十一日若殿様の御登城被遊候様との御達有之候に付十一日五ツ時御供揃に



御登 城被遊候處

一橋刑部卿様松平春岳様其外閣老方御列座に在り此度

勅諭之御旨趣御奉行に在り其向々の御沙汰被仰出候節は御直に御答被仰上可申候得共當節其向々取調中にて彼是猶餘致し候儀に付此趣一往御達致し置段 刑部卿様より

若殿様の御達被成候に付此段被仰上候様奉存候恐惶謹言

（此書は文久二年閏八月木戸孝元が江戸の狀を報告せんとしたる草案なり）

拜啓昨日は態々御光來被成下不取敢近邊御供申上候處不計大醉早晚之通前後大失敬奉恐縮候偏御降恕是願候儲其節被仰置候明日兩御家老御有志方御目通にて家老之者共の御面會先日以來之御内話御一口に被仰聞候筈之所明日は無余儀差間に在り心外千萬に奉存候得共難差繰次第に付御斷申上度廿七日八日に御座候得は決る差間候義は無之候間御治定之處被仰聞

御待可申上候先は右相同度爲其勿々頓首九拜

閏月廿五日

尙々御光來之日御決定之上御一答之御序に尙刻限とも被仰聞度奉存候拜

小五郎

（對州藩大島友之允種田莊藏）

友之允様  
謙之亮様  
莊藏様御直

（井上小豊後國司治人は長藩士なり）

井上小豊後事根役より當分

若殿様御付御與所勤被仰付御歸府御供に在り被下其儘相勤居候處同役國司治人事伏見以來氣分相に付御道中小豊後義大抵一人に在り相勤尤治人事御道中に在り少々快く纒之間相勤候得共又々痲病之症に相成今以耽々無之當分に出勤可相成様子に不相見當節



若殿様御出事も繁く御當らせ根之御用も多く候上學習院一件御用一條に付おは御會議事其外御用繁く此御時之事に付成丈ヶ盡力仕候得共何共御間難合御不都合之義も可有之哉と奉恐入候付何卒御詮議を被盡被下度由根來上總を以申出候實に小豊後義夜白無寸暇様被見請難堪様に被相考候得共於爰元同格之内當分御雇被成候人柄も無之有地藤馬は御供頭御差添之節御雇掛り候迄之事にお何とも御差添之様相見候間早々御詮議相成度此段無御疎御事に可有之候得共各様迄得御意候間御勘考御取計可被下候由

御面書之通致承知彈正殿申達候治人事御旅中以來所詮氣分不相勝候由之處當分可遂快氣容體にも無御座候哉先達る毛利登人被差下候付小豊後根之御用差問候節は御内用一條は差繰も可相成其上御供之儀に付おは有地藤馬は御沙汰相成候趣も有之何卒御問合せ候得かしと存候小豊後義兼お強壯とは乍申被仰越候におは實に苦勞之至致遠察候得共差向

増人數之御詮議も六ヶ敷尤治人氣分前段之通り當分可致快氣體に無御座候得は何と歎御詮議不被仰付おは御差問にも可相成に付今一應委細之趣被仰越候様にと存候此段及御意候様彈正殿被申付如此御坐候恐惶謹言

閏八月廿七日

戊閏八月廿七日立之飛脚便を以

前田孫右衛門様

桂 小五郎

拜啓

各兄彌御壯榮に御起居奉大賀候さて一昨日は態々御來光被成遣候處匆卒にお乍早晚失敬申上候其節被仰置候義昨日中に御答申上候御約束に御座候處昨日は内外種々雜用にお一統奔走多く小幡も夜中歸邸仕候位にお及延引候段奉恐縮候今日晝過より御光來被成遣候お格別故障は無御座此節

(小幡は小幡彦七)



之事に於自然萬一俄之義出來仕候とも乍恐少々御待被成遣候時は決る差  
繰之出來ぬと申譯は有之間敷に付萬々乍失敬其御合に於御家老御光來之  
程奉願上候

各兄方御主意之程は小幡逐一拜聽得と落着仕居申候に付家老共へ御面會  
之儀々御都合次第に於よろしく乍去於弊邸は毛頭故障は無御座候に付無  
御用捨無之様奉願候先は爲其奉得御意度奉呈候勿々頓首百拜

九月一日

五 郎

友之允

謙之亮 各大兄

莊 藏

（對州藩大  
鳥友之允極  
口謙之亮多  
田莊藏）

拜啓彌御壯榮奉大賀候さて昨日は折角御光來被成遣候處折柄混雜中に於  
諸事勿卒之御引受申上毎々不敬至極何とも恐縮之至に奉存候其節明日御

（政之介は  
周布政之  
助）

光來被成下候御都合御約束申上置候處明日は晝後長門守様土州邸に御出  
被爲成候に付政之介私とも事に寄罷出候様相成候歟も難計折角御光來之  
處一同留守中ともには重々奉恐入候儀に付此段申上置度尤朝之内に御  
座候得ば格別差問候事も無之候得共彼是勿卒に於御互に何事も十分に  
盡不申候間後日と御約束申上置候方却る可然儀歟とも奉存候得共  
老兄方御都合も可被爲在候間何分之義御一答奉願候左候は、事により邸  
外に御引受申上度奉存候先は爲其勿々頓首百拜

初七

五 郎

友之允

謙之亮 各老臺拜呈

莊 藏

（對州藩大  
鳥友之允極  
口謙之亮多  
田莊藏）

去月廿七日中山殿へ家老兩人罷出候様との御事に付筑前殿彈正殿參殿被



致候處今度佐兵衛持下候御書面御渡方相成候由差向き候事故佐兵衛に持下被仰付候得共家老兩人態々被召出候御渡方相成候程之義に付筑前殿出府被仰付候事之由に御座候就るは先刻御咄之通若殿様より橋越二公始閣老方えも早速被仰込候方可然と奉存候只今

御前會議被仰付候由に付老兄御出勤被成候は、此段可被仰上御出勤相成兼候は、弟より可申上哉何分之義御一答奉願候頓首九拜

九月十二日

桂

（周布政之助）

周 布 様 念 々

（裏書）表諭之通は勅書をは先不被差出只々御互之口上を以申述候事に仕置度奉存候頭痛烈敷候付何も程克御頼仕候勿々奉復

乃

再白 儲公御直に被 仰入候義は筑前着まで先御見合せ被成候可然哉と奉存候

桂 様

周 布

一筆致啓達候林主税事

此度御國に差下候處

思召を以吉田

洞春公御廟

御代參被仰付候右は御添狀相調候上御沙汰相成候付右之趣御當役方可被仰上候此段各様迄申進候様彈正殿被申付如斯御座候恐惶謹言

九月十六日

赤川友之允

桂 小五郎

中村 九郎

山田宇右衛門

中島市郎兵衛様



引田新左衛門様

大島 大兄拜呈

允

(對州藩大島友之允)  
(大久保は大目付大久保越中守忠寛なるべし)

尙々ミテールは大久保氏受込に御座候哉半途之事に御座候得は横濱へ被仰越候方速に相運候事と奉存候以上

昨夜以來駈違不得拜青彌御多務と奉察上候さては千々萬々申上兼候得ども曾る粗御願申上候ビストール之儀江戸へ被仰越被遣候様御都合次第奉願上度委細御一面上可奉願と奉存候處御飛脚御立御迫り之事に付乍失敬鳥渡申上候勿々頓首九拜

二十一

今日は大失敬御降恕奉仰候竹山兩人元より正義之ものには毛頭御腹臆には不及十分に御相談被成遣儀え弟よりも奉願候尤弟兼る御同藩と相成り

候心得に御相談申上候儀は兩人之席には御用捨を奉願度今度之儀も弟御同藩之心得に御参考候には今一應も家老の御面會被成候被仰説終には世子の御面會にて重々之意味御説被成度御所存位に無之るゑ容易に貫徹仕間敷決る御用捨に其邊之儀え及ひ不申候間飽迄も十一分に斷然御せり込可然候兎角物事は思ひ候ほどは貫兼候もの故大事之機會に付御用捨有之候るゑ不相濟乍去倫理に係り候事なそは脇より十分とは勢被申込ぬ次第も有之候に付其邊之處則御相談と申ものには可有之候間未來之御處置得と御勘考申上る迄も無之御疎は有之間敷候得共御一大事に御座候弊邸有司之ものかゝる御大事況や

御他家之事故兎角決斷御六つヶ敷次第も有之候に付何も尊公様方より御申込之都合御駈引肝要と奉存候爲其勿々頓首九拜

廿一夜

御三人様御内披

木戸孝九文書卷二 (文久二年九月)

二百三十三

(御三人は大島友之允樋口謙之亮多田莊藏なるべし)



（周布は周布政之助）

（川長は深川の川長様なり）

昨夜は不圖大醉早晚之通前後大失敬御高許奉仰候然は弟歸邸後無餘義次第に直に外出芳原に出かけ申候就は今朝弊邸に御光來被下候とも弟は留守中に可有之候得とも周布は在宿仕り居可申候間何事も無御用捨御嘶可被成候乍去弟昨夕尊邸に罷出老兄方に御面話仕候次第御嘶有之候も甚不都合千萬に付此段御含み置可被遣候尤昨夜御約仕候通周布へ御相談被下川長迄出かけ候は、弟も御様子相伺不意に罷出候もよろしく左候は、御同様に心事を盡し可申候何分之御左右相分る事に御座候は、淺草田町之茶店小川屋と申内迄晝頃迄に御聞せ被遣候様には相成申間敷哉其内都合次第弟參上申上候もよろしき儀と奉存候先は何分之御様子相伺置度奉呈之候勿々頓首拜

念五

尙々明日老兄方に御面話仕候次第は御無言に被成置度奉存候且又周布

（大島友之允樋口謙之亮多田莊藏）

（古川大夫は對州藩古川治右衛門なり）  
（高杉は高杉晋作）

御面會之節余り強而西上之事を被仰掛候は、自然疑念相起し候歟も難計左候得は御互に誠意相貫き不申候に付申上る迄も無御座候得とも一應爲念申上置候都合次第晝頃迄には御尋も申上度其中周布之義相分り候は、一刻も早く拜承仕度奉存候拜

大島

樋口 各老臺

多田

五

郎拜

田町小川屋と申茶屋より

昨日は前後亂暴狼籍何とも赤面之至に奉存候然ま今日古川大夫に周布高杉私とも拜話申上候義昨夕 兩大兄より懇々被仰聞今朝何分之御答可申上奉存候所幸今日

慈芳院様御歸國一條に付周布其御邸に罷出申候間古川大夫に御面話仕候



義は乍失敬於御邸可然御周旋被成置候御取計奉願上候高杉一條も今日何と歎伺定置度就る私後刻參上仕候間其節も可得御意候高杉も今日罷出候得去無此上事故此段内々可申遣と存候得共自然外出どもに有之候て無是非義に御座候乍去去留之事は兩大兄の拜眉の上御相談可仕置段奉願候爲其勿々頓首九拜

十月二日

（多田莊藏）

尙々今日之義は昨日おもに兩大兄より奉伺候に付多田君の不申上候得とも全趣意有之候儀は毛頭申上る迄も無之次第故

大島

桶口 兩大兄

木 圭

（大島友之  
亮）  
（大島友之  
亮）

可然御致聲奉願上候何れ高杉之義は多田へも此段兩大兄より先御頼置可被遣候拜

○

拜啓只今周布は御館に罷出申候彼も追付川長樓に参り可申候高杉には出かけに一書差遣し置候處如何之都合に候哉引當には相成申間敷内居さへ致し居候は、早速出かけ可申候たとへ同人不在とも兼御願仕置候事は今日何と歎相伺置可申候爲勿々頓首

初二

大樋多三大兄

木 圭

（大島友之  
亮）  
（大島友之  
亮）

○

拜啓昨夜は御先の失敬申上候借今晝後登館可申上御約束仕置候處俄に今晝後世子御前において會議被仰付候に付今晝過に登館申上候事些六ヶ敷然處明日は仕廻次第出足仕候事故余日も無之晚にかけ候罷出候可然哉又は御猶餘相願可申哉何分之義御差圖被成遣候様奉願上候先は勿々頓首九拜

木戸孝元文書卷二（文久二年十月）

二百三十七



十月七

大島

樋口三大兄

多田

木 圭

(對州藩大島友之允樋口謙之亮多田莊藏)

拜啓先以今度儀之不意之候御出候に付天孟を御頂戴被爲遊

殿様過る四日御參内被遊候御様驛奉拜承知誠に三百年來之御盛事 被爲對 御祖宗様無此上御孝道に被爲在御同様恐悦無様至極に奉存候

儲公にも被爲開召不一方御満悦に可被爲在と奉想像只管に憾泣に堪不申候就多此上益御貫徹之御目途相立不申多は不申相成と奉存候候儀重要之御事

前略爾後彌

御壯榮に御忠勤奉大賀候二に弟於金川白水兄御別れ申十日原驛に罷越對又兵衛九郎兩州三子相待日夜直に弟儀出足仕候處兎角不順に漸一昨十三日宮驛に着仕不圖檜崎に出會仕候に付一夜互に東西之近情を相語申候

(小南は土佐藩小南五郎右衛門なり)

(檜彌は長藩士檜崎彌八郎なり) (岡本八之助岡本常之助池藏太皆土佐藩の人なり)

(本山只一郎は土佐藩の人なり)

勅使も十日御發與之御様子於途中取沙汰仕候付左候得は於此驛拜謁仕候事と相心得候處御發與は彌十二日に相違無之御様子に土州侯十一日に御發與被爲成候由に御座候御止宿之御様子に付渡海仕候先小南を相尋明十四日候付今晩桑名と存候所御先に出府致し御譯子に十三日宿通り貫ヶ候様子に同人池可申鯉鮒之泊りに懸違ひ遺憾千萬に御座候御婚禮一件も此御方御評儀之次第とは些相違仕候趣委細は同人着之上御直談可然奉存候左候多昨十四日渡海仕候處土州侯無相違桑名御止宿に付御本陣に可罷出と奉存候得共御周旋申問敷と存係候者の面會仕候被仰合候趣得と申入不申は氣脉難相貫と奉存檜彌より承知仕居候に付岡本八之助と申仁爲相尋候處早速同夜岡本八之助岡本常之助池藏太三人同旅宿に罷越候付府下之近情をも相談儲公より被仰聞候御示趣も申陳候處三人直に御本陣に罷出候申入吳候様も早速君側相勤候本山只一郎一書差越候に付罷越候處申上げ次第君前都合に被召出候御様子にも有之候得共最早四つ半過にも有之候歟御寢所に被



大久保越州は久保越州中守忠寛越州守河守長常にて皆幕吏なり

(高崎は薩摩藩高崎猪太郎なり)

爲入候由に御間態々君前相願候不申とも悉細得と入御耳候得は宜儀と程之儀にも無之と奉存且本山は小南に  
等と共に有志之仁と三御輔佐申上候由に付士より承り候に付橋越會并大久保岡部其他幕  
小吏之情態見聞之ま申陳候所土州侯有志之ものも於京都傳承致し居候  
處に御は越會等因循論に御橋公獨御確乎と被爲成居兎角橋越之間御調和  
御六つヶ敷就御は容堂公御一類に越派と何となく評説有之尤近頃橋公も御上京  
に付候御賂金等御持參など不潔之御評判粗有之候由に御座候得共前説尤  
盛に有之候に付此度も上下一同其已掛念仕居候處委細承知仕公にも申上  
候は、大に御安堵可被成於下も一と先安心仕候由申候於宮薩高崎にも面  
語致し其節之容堂公佐兵衛兄御傳言承知仕候の謁し候話彼より承知致し候ま、相語り候處一入安心仕候様悦喜之  
體に相見申候御婚禮御一件檜彌より承り候得は土御國御隱居之御氣付も  
被爲在候御様子に御座候得共本山之話には有志ものは御國婚禮を相願  
居候同人とも此御方より御掛合幾筋にも相成居候歟と相心得居申候是  
は留守居之外や御裏は松井等より掛合候に付左様相心得候事に可有之就御は

周兄御付札被下候ものも相見せ候處於本山は至極同意に御座候其中小南  
も着可致候付御熱談相成候は、早速相決し候事と奉存候且又  
勅使も一二日此驛御止宿に付昨日より相滞居候昨先三條姉小路兩卿  
に罷出拜謁仕左候橋越會其外幕吏之情態土州に申入候通已前申入候通委細言上仕候處至極御喜  
悦に御厚御禮被仰聞尙事により候は、一兩人江戸御着兩三泊御泊邊へ已前之處に  
罷出候御其後之情實をも可申上儀も可有之段申上候通御兩卿とも此儀は  
是より強御相頼候儀に付專周旋可致關係候仁着兩三日前に自分二三泊前折角其は是非出浮吳候  
様仕度此段吳々申遣吳候との御事に御座候間此段御承知可被遣候一體  
奉存候御臨督御公にも事により掛り之もの致面話候是は其節之御  
勅使始御入城前御面會被爲成度思召に被爲在候得とも是は其節之御  
都合も可有之被仰聞候追々

儲公御面會も被爲在候は、其節は各兄方へ御一人は是非御付添ひ被仰付  
奉存候三條卿は御才氣御隠し被爲在姉小路卿は御才氣を御顯御自分之御



才氣を御包み被爲成候と御顯被爲成候との相違は有之尤三條卿御頼母敷  
奉存候先は於御途中

勅使并土州侯に罷出候始末□之次第に付此段得御意候間兩大夫にも被仰上可被下候  
爲其余は讓後便候如此御座候勿々頓首敬白（以下缺）

（宛名署名缺く、文久二年十月十五日周布政之助等に贈りたる書の  
草案なり、次は本書なるも一昨十四日とありて一日の齟齬あり）

拜啓先以此度俄之被 仰出に去る四日

公臺 御參内

天顔御拜をも被爲遊候御様子於原驛奉拜承誠に三百年來之御盛事被爲對  
御祖宗様無此上御孝道被爲立御同様恐悅無限奉存候

儲公にも被聞召不一方 御滿悅と奉想像只管感涙に堪不申候就るは此上  
益御貫徹之御目途相立候儀申上候迄も無之肝要之御事に奉存候將又 各  
位彌御壯榮に引繼御奔走奉大賀候二に弟も於金川驛又兵衛九郎兩兄の御

別申候も十日原驛迄罷越對州三士相待同夜直に先へ出足仕候處兎角道中  
不順に去る十三日漸宮驛に着仕不圖檜崎彌八郎の出會仕候に付一夜互  
に西東之近情相語り申候

勅使も十日御發興之御様子於途中取沙汰仕候に付左候得は於此驛拜謁仕  
候事と相心得候處 御發興は彌十二日に相違無之御様子に於土州侯十一  
日之御發駕に於十四日桑名御止宿之御様子に付先小南を相尋可申と存候  
所御先へ出府致し候都合にて當日此驛通行彼池鯉鮒之泊りに懸違ひ殘  
念千萬御坐候左候も一昨十四日渡海仕候處土州侯無相違桑名御止宿に付  
御本陣に可罷出と存候得共御周旋に致關係候者の面會不仕は被 仰聞  
候通府下之近情得と申入候とも氣脉相貫申間敷と存檜彌より承知仕居候  
に付岡本八之助の一書相投じ候處早速岡本常之助池藏太一同旅宿に罷越  
候に付府下近情をも相咄被仰含候御示趣も申陳候處三人直に御本陣に罷  
出申入吳候由に早速君側相勤候本山只一郎より一書差越候に付罷越候



處此方都合次第君前に被召出候御様子にも有之候得共最早四ツ半過頃にも相成頓に御寢所に被爲入居候由に付態々君前相願不申とも委細入御聞候得は宜儀と相心得且本山は小南等と共に御輔佐申上候有志之仁と三人よりも承り候に付橋越會三藩并大久保越州岡部駿州其他幕小吏之情態も見聞之まゝ逐一申陳候處俟始有志之ものも於京都傳承致し居候處には越會等所詮因循論には橋公獨御確乎と被爲成居兎角橋越之間御調和御六つヶ敷容堂公にも越御一派と頻に評説有之尤近頃橋公も御上京に付賄金等御持參など不潔之御評判も有之候由に御座候得共前説尤頻に有之候に付此度も上下一同其のみ掛念仕候處委細之御咄承知仕候俟にも申上候は御安堵可被成於下も大に安心仕候由申候於宮驛薩高崎にも致面會佐兵衛兄御傳言も承知仕候其節彼容堂公へ謁し候話も承り候まゝ相語り候處一入安心仕候様相見候御婚禮一件も檜彌より承り候得は御國御隱居御氣付も被爲在候御様子に御坐候得ども本山之話にはいかにも御國婚禮を

相願居候由申候同人ともに此御方より御掛合幾筋にも相成居候に付一定難仕歎に相心得居申候是は留守居之外御裏哉松井等よりも掛合居候に付右様相ひゝき候事に可有之就は麻田兄御付札被下候ものも相見せ候所至極同意御座候其中小南も着可致に付御示談相成候は、早速相決し候事と奉存候且又

勅使も昨十五日此驛御止宿に付一昨日より相滯居候は昨夜三條姉小路兩卿に罷出拜謁仕橋越會其他幕吏之情態土州に申入候通言上仕候處至極御悅には厚御禮被仰（御字不明出力）□尙事により候は、一兩人江戸御着兩三日已前に御泊邊へ罷出候は其後に情實可申上儀も可有之段申上候處御兩卿とも折角其儀は是より強は相頼度儀に付専ら周旋に致關係候仁着兩三日前に泊りへ出浮候様仕度此段吳々申遣候様との御事に御座候間御承知被成下早々御出浮有之度奉存候一體  
儲公にも事に寄り



勅使御臨營前御面會被爲成得と幕府之近情をも御承知被爲成度思召も被爲在候由に御座候得とも是は掛り之もの致面話候は、其節之都合も可有之と被仰聞候追々

儲公御面會も被爲在候は、其節は各兄方御一人は御付添ひ被爲成度奉存候兩卿とも御議論は随分有之候様被窺候得共三條卿と姉小路卿とは御自分御才氣を御包み被成候と御顯し被成候との相違は有之一入三條卿御頼母敷奉窺候

勅使并土州に罷出候始末先右之次第に付此段得御意候間兩大夫にも被仰上可被下候余は讓後便勿々頓首

十月十六日

小五郎

允花押

尙々於宮驛高崎に面會致し候節彼之話に於興津小松帶刀に逢候處三郎殿急速上京有之候様にと被仰出候由申候に付昨夜三條卿へ如何之御用

筋に御座候哉と御尋申上候處承知不致と申候はいかにも不審に可被引受候得ども發興前更に承知不致定近衛殿御取次ともに御内々被仰出候儀どもに有之し歟との御答に御座候頓首

政之助様

又兵衛様

九郎様

佐兵衛様

昨夜は大頂戴に前後大失敬申上候借は今朝早速罷出可申之處對州人より受取書面も有之候に付少々隙取申候間左様御承知奉願候勿々頓首

十月十八日

桂

山田様御直

(山田字右衛門)

(裏書) 只今

木戸孝允文書卷二（文久二年十月）

二百四十七



御前被召出候付即刻御出勤可被成候他は後刻に譲り申候以上

乃

二陳定<sub>る</sub>對州一條に<sub>も</sub>可有之哉左候へは御受取もの等は要用<sub>之</sub>儀と奉存候以上

○ 山<sub>下</sub> 田 様御直急キ

桂<sub>上</sub> 様

彌御壯榮奉賀候さて昨日着仕候處直に邸に罷出其より對州人を訪彼是隙取深更に歸宿今朝昨夜之御手紙相見せ候位に付昨夜何とも失敬仕候今日は是非差繰候<sub>る</sub>拜眉仕度奉存候爲其勿々頓首

十月十八日

桂 小五郎

久坂玄瑞様

一筆致啓上候然は私共過る廿八日夜八ツ半時伏水に罷出に付薩土之様子

（中川侯は  
岡藩主中川  
修理大夫久  
昭なり）

（熊田萬八  
は岡藩の  
人なり）

相尋候處土よりは兩人出浮き相成居候由に御座候得共未薩よりは何事も無之に付昨廿九日朝まで見合候<sub>る</sub>相尋候處誰も出浮不申中川侯は明日にも伏水迄上り候歟の評判も有之就<sub>る</sub>は一刻も速に浪華に下り相止め不申<sub>る</sub>は其詮議無之事に付土藩申合せ薩に一書相殘し置候<sub>る</sub>上船仕晩刻着坂致候間早速薩土兩邸に掛合兩藩着之上御屋敷に於て一往會議仕三藩より一先中川旅宿へ罷越候段申込四ツ時にも有之候歟三藩一同罷越熊田萬八と申者<sub>の</sub>面會致し候<sub>の</sub>面謁<sub>之</sub>義申入候處一應奥に入無間罷出委細主人の申聞候處國元より不快に有之候處押<sub>る</sub>發駕にも相成道中に於ても兎角不快候に付今日一日爰元にも滞留致し明日は取繕發駕致し上京之上陽明家にも拜謁相願委曲直に申上候心得故各より可申聞せ吳候様との事に<sub>も</sub>更に京都之御不都合等は聊氣の付候様子も無之是非不取敢上京にも相成候處存に相見候間自然此儘上京に相成候<sub>る</sub>は一同罷下り候處詮も無之其上奉對



朝廷候も不相濟事に付是非共押る面謁相願度事柄につきては重大之義に  
 む御役向被仰聞候事に付御家老方及御談様には難相成尤明日御不快に  
 付御滞坂相成候も御快氣之上面謁被仰付候事に御座候得は幾日にても相  
 積居可申候得共今晚は御斷に相成明日は御氣分御取繕押る御上京と申事  
 には不容易義に乍恐中川御家御浮沈にも相係り候事故此儘引取かた  
 く段申込候處又々重役中申合せ候と相見面謁被致候と申事に無間案内  
 致し候に付一同罷出面謁致御役向より被仰聞候次第現在御不都合之處有  
 の儘申上候處如評判至極多辯にて種々被申解候得共一向條理も不相立其  
 上頻に早速上京致し候も直に被申解度口氣も有之得と合點に入兼候様被  
 窺候に付第一に今度櫻田坂下一件之面々迄も赦罪被仰出候折柄恐多くも  
 御叡感迄有之候人柄容易に嚴譴被仰付其儘何事も不被仰上必竟被蒙  
 御内勤候義春以來小河列以下京狀之間に罷出爲勤 王御周旋有之るこそ  
 候勤 王之御志も徹上致し候事に可有之就るは此節之御處置にて全御違

（熊田要助  
 小原隼人皆  
 岡藩の人な  
 り）

勅之姿に自然入 叡聞候節は如何様之嚴譴被仰出候共無是非御事と奉  
 存候何分にも速に御悔悟被成明日之御發駕御延引可然段屹度申陳候處漸  
 御合點入候歟に相見右邊之義得と承知致候もは深く恐入候事に付此後之  
 義尙家來ともにも無腹臆申聞せ吳候様との事に付一先引取御發駕彌御延  
 引に相成候歟之處承り可置と存候處重役之者被罷出別席に案内致し彼熊  
 田要助小原隼人も罷出深く主人に於ても奉恐入候次第に實に中川家浮  
 沈にも相係り不容易事に付此後之處如何致候も可然哉何分にも差圖致し  
 吳候様達も歎願致し候得共何分共差圖致し候筈も無之必竟小河列以下御  
 不處置之處より相起り候義に付早速明日にも御赦罪之義急に御國に被  
 仰越候に之御滞坂に御家老にも御上京被致御不處置之次第逐一御役  
 向に被仰上左候も御進退も御伺被成候は、何と歟御差圖も可有御座其  
 邊之義は三藩之者よりは何とも御差圖申上様も無之段申置引取申候今日  
 之御發駕は御延引に相違無之就るは定る家老之者にも上京仕正三卿に



可罷出候間是迄之次第得と正三卿に被仰上置屹度  
 朝威相立候處之御沙汰被仰出候様奉願候此度中川家出府も關東より急召  
 之由に候得共右之次第に三藩の御役向より被仰聞三藩より罷出差止め  
 候付は薩土兩藩よりも早速關東に申越候由に付於此 御方も其御都合  
 可然と奉存候昨夜兵庫よりも飛脚差越一左右次第大番其外出足爲致候様  
 申越候處中川家も先前段之都合に深く恐入居候事故出足には及び申間  
 敷段申越候私共は御役向より何と歎御沙汰相成中川家進退相決し候を見  
 届候上京可仕候間前段之趣委細彈正殿に被仰上可被下候爲其如此御座  
 候恐惶謹言

十一月朔日

桂 小五郎

佐々木男也

(佐々木男也等皆長藩の士なり)

尙々中川家よりも關東へ早速飛脚差立候由に付御一同御一見相濟候は  
 此書にも早速關東の御廻しに相成候は、今日迄之情實も相知可申

と存候以上

前田孫右衛門様

宍戸九郎兵衛様

村田次郎三郎様

竹内正兵衛様

山田宇右衛門様

(岡侯は中川修理大夫久昭なり)

御手紙拜見仕候扱は態々伏水の御出浮之由御苦勞之御事奉存候岡侯一條  
 も今朝小國便りを以申上候通談判最初には少々俗論を張り候故終に兩三  
 人は斃し不申は徹底仕間敷とも氣遣候處面謁之上達勅之魁を被成候は  
 は御浮沈此際に有之候段入々申陳候處大に屈服に俗吏とも殊之外畏縮  
 に今日御邸に熊田要助小原隼太熊田萬八罷越候に付此後之處屹度督責  
 仕候處早速明日之中國元の急飛脚差立小河列以下赦罪之上同人共當春



上京爲勤

王周旋盡力仕候に付厚き奉蒙御褒詞岡候も御勅諭御頂戴に相成候義に就  
 ゐは對其旨右之仁々にも俟より御褒賞も無之ゐは不相濟に付其邊も昨夜  
 以來合點に入是非此度詮議仕候趣左候ゐ京都には右三人罷出正三卿は拜  
 謁仕候之進退其外此後之所致相伺候由に付其節存外容易に相濟候ゐは私  
 共俟に屹度申込候廉如何敷去りととも眞に悔悟致し候者を大に苦しめ候  
 にも不忍臨機之御取計可有之候得共爲念申上置候且又萬八事は京都之御  
 様子相伺早速歸國致し小河列以下赦罪之上御褒賞被相行候様國家老は爰  
 元より被申越候義可被相行を見届候ゐ歸國致し候都合に御坐候間都ゐ是  
 等之廉正三卿は申上義と爰元には私共承知仕候と合一之處承知仕候ゐ早  
 速上京可仕候伏水に被差出居候人數は此後  
 朝廷より修理大夫は何と歟御沙汰相成敬服被致候を目途に退散被仰付候  
 方可然と奉存候間二藩よりも相談致し候に付私共上京且人數退散之義は

右様に先相答置申候先は右御答旁申上候榮太も今晚直に差歸し候も實は  
 岡三人今夜より上京仕候に付ゐは爰元にて承知仕廉と正三卿方は申上  
 候廉と相違致し候哉も難計に付爲念差歸申間此段陸山翁へも御知達奉願  
 候先は爲其勿々頓首九拜

十一月一日夜中亂筆御推讀奉願候

小五郎

尙々虎之進明日上伏仕らせ候様白根申候間左様御承知奉願候以上

橘扉老臺御親拆

○

(橘扉は尖  
 戸九郎兵衛  
 なり)  
 (間崎は土  
 佐藩間崎哲  
 馬なり)

間崎氏にも近頃疎濶に打過候乍失敬可然御一聲奉願拜  
 只今御宿に參上仕候處御投書有之奉拜誦候昨日は弟等どもこそ前後亂暴  
 狼籍大不敬已み相働奉恐縮候今朝も早天參上仕候御約束申上候に付大に  
 こゝろせき候得共無據用向出來不圖遅々仕御違約之段御高許可被下候借



(周布は周布政之助)

彌明日御發途被成候哉左候得は今晚にても明早朝にゐも是非々々拜話不仕ゐ不相叶候對州一條に付今日只今より下谷の向ヶ罷越申候昨日川長樓にゐ周布老兄の一書を入雷覽哉一橋卿も昨日長門守城中に拜顔仕候節御咄仕候儀至極御尤と被仰候由其節  
御發與も先御見合之御口氣に被伺候由と申事に候得どもいかゞ哉と昨夜歸り候後も案じ居申候處今日先御延引之段御知せ有之候其上昨日は春岳公御登城に付一先安堵仕候尙今日は委細之御様子も相分り可申と奉存候弟申上候儀は即今に限り候事には無之尤老兄被仰聞候儀御急きに御坐候は、御差圖次第いか様とも可仕爲其伺申候閣筆頓首九拜

初二

小場盟兄御親拆

木 圭

(小場は小場源介にて水戸藩住谷寅之助の變名なり)

昨夜は甚失敬申上候さて明朝々薩土兩藩弊邸の引受候都合に申合せ置申

(大島友之尤樋口謙之亮多田莊藏)

候間朝より御出掛奉待候御初會之事に付迄仕候方と奉存候尤決之諸事御心配にはおよび不申候間必々誓之聊も御配意無之様奉願候頓首九拜

十一月二

大樋多三大兄御親拆

木 圭

一筆致啓達候

(隱岐は長藩老臣毛利隱岐なり)

御兩殿様益御機嫌能東西御滯駕御周旋被遊恐悅至極奉存候將又御國御靜謐隱岐殿御勇健各様愈御堅勝可被成御所勤奉珍重候當御地無異義越後殿御勇健一建無別條致京候御放念可被下候  
一上々様御待受御普請も追々御調可被成御繁忙之程致御察候 若御前様其外様今三日江戸御發與之御到來有之恐悅御事御座候委曲江戸より申參可被成御承知と存候

一大島郡遠崎浦と岩國領江浦と網代爭論掛り合一件全義物並聞合とも江



戸の差廻置候分此度及 御聞差返候付別紙三通差越申候御受取可被下候

一先般攘夷之儀 勅使を以關東に被仰進候 勅諭寫別紙一通差越申候 勅使も先月廿七日御着府之由幕議紛々總裁職も余程御苦心之御様子に相聞候

若殿様御奉命御周旋筋何と歎御都合能相調候早々 御發駕被遊候様舉る所仰に御座候會津土州幕吏に者大久保越州杯權證不一方御周旋之由に御座候

一此度中川侯江戸御用召に大坂まで御登之處當春以來爰元罷出居候彼藩小河彌右衛門其外先達

朝廷より別紙御内書頂戴致歸郷候は、召捕孰も牢舍被申付候由右取計筋

朝廷を輕蔑に相當且は俗論を醸し候一端に付此御方猶薩州土州申合修

(大久保越州は幕吏大久保越中守忠寛なり)  
(中川修理大夫久昭)

(伊勢は長藩老臣毛利伊勢なり)

(小田村文助は長藩士なり)

(越後は長藩老臣福原越後なり)

理大夫様大坂伏見之間御通行被差止右御不取計之趣相正し候様御内沙汰有之三藩申合其筋之者大坂まで被差越朝議之趣を以詰問候都合之趣別紙之通申越寫入御披見候早速 朝廷に御侘之使者被差立小河其外赦免に相成候由修理大夫様に去暫伏見御滞りと御内命下候様子相聞候右不取計之筋於 公邊も御糺し相成候様 朝廷より御沙汰相成候由其段三藩よりも被仰立相成筈に御座候

一伊勢殿御氣分も只様被相滯上京内斷被差出候由甚遺憾之至御座候御當役方御議論如何候哉梨羽備御召登之御沙汰相成候上京之儘伊勢殿御進退も何と歎御沙汰可相成長府岩國にも此内小田村文助御内使者として被差越候伊勢殿一件於 君上も余程御懸念之御様子と被相伺候其後物議鎮靜相成候哉何分各位御痛心之と奉察候

一越後殿御用筋も今以埒明不申候孰十日頃迄には御出足相成候様御暇出候得かしと致心配候大坂御滯留も五日位は相掛り可申左候得者達し當



（山縣吉之助は長藩士なり）

月中には御歸着可相成岡藩一件に付宍翁伏水に罷下直様大坂罷越爰元別御無人に付御用筋示談事運ひ兼不任心底次第に御座候今一兩日之中に去岡藩一件も片付可申左候得は越後殿御暇事も相決可申山縣吉之助事も右一件に付當分出足延引被仰付候先々差向も可得貴慮如是御座候恐惶謹言

十一月三日

桂 小五郎

尙々不能申候得共御氣分御厭爲國家奉專一候以上  
本書開合書追便差送可申候

○ 此度は始々奉得拜鳳緩々御高諭拜聽愚意之趣も不取敢無腹臆吐露申上實に十年之御知己の如し生來之仕合雀躍之至奉存候借亦内願仕置候浪華御邸之儀は極々御内密に奉願度就ては萬々御手數之段重々奉恐入候得共自然幸便共被爲在候は、村岡大夫村岡近江後根緒功富へ極密之趣尙又被仰遣度は亦奉

（大江は平田大江にて對州藩の人なり）

願候實に總々目途も相立兼候へは御高見の如く天下一定の策終に相立不申候亦々不知不識外夷之術中に陥り必竟 神州之御爲不容易御事と浩歎之次第偏に此處天地に祈誓仕候次第に御座候先は一應之御禮且御願旁乍略儀奉呈候時下自保專一之御事に奉存候草々拜具

十一月六日夜

小五郎

大江 様

乍毫末御賢息様諸大兄へ可然御致意奉願上候

○ 近頃兎角奔走多く御無沙汰のみ申上候彌御壯榮に御忠勤無此上めて度奉存候陳は別符呈上仕度候間早曉之通可然御取計奉頼候世間之光景も一變致し御先如何可相成哉實以

神州之御安危何とそこまでも正氣相貫候様奉祈念候近況も得御意度奉存候得ども殊の外多事其上飛脚も差急弟も只今より上京仕候に付眞之一



筆御頼旁呈し奉候末兼氏其外諸彦へ可然御致聲奉頼候其中時下御自愛第一に奉存候爲其勿々頓首

十一月七日

小五郎

有馬彦兵衛

彦兵衛様

不敬至極奉恐入候得ども實に機に後れ候事も有之弟申上候は不忍様奉存候得共是又

皇國之一關係に付候は不得止申上候御用被爲濟候は、烏渡御歸宅奉願候勿々急呈

八日

允

多田様御直

（多田は多田莊藏にて對州藩の人なり）  
（幕吏永井玄蕃頭尙志）  
（土佐藩平井收二郎）

御手昏拜見仕候今夕永井玄蕃頭え平井収二郎同道に罷越今日之事情得

と相論じ市中惡徒横行等之義は町奉行所より嚴重に詮義致し候様爲致度

奉存候に付相約し置候處

御前會議被仰出候に付是是非私も登

殿不仕は相濟不申哉今一往何分之被仰聞候様奉願候爲其勿々頓首

十一月十一日

桂 小五郎

宍戸九郎兵衛様

山田宇右衛門様

御面書御懸り筋御用有之候得は御出

殿無之候も可然申合せ取計置可申候以上

即

宍戸九郎兵衛

桂 小五郎様



（平井は平井收二郎にて土佐藩の人なり）

（前缺）いかゝの御都合に御座候哉趣次第平井に申遣し今日之所相断り可申哉と奉存候間一往相窺度奉呈候勿々頓首

十一月十三

尚々村二には御傳言之趣相傳申候拜

桂

○ 穴戸 様御直

（穴戸九郎兵衛）

御面書之趣奉承知候御差岡之義御断可申上候村田は相濟次第登殿仕候様御傳可被下候以上

即

十一月十三

○ 穴戸 様御直

上 桂 様

（瀧彌太郎堀眞五郎は皆長藩士なり）

別帝御判相濟候は、八日之御沙汰書と御一符にて御仕出可被遣候且又瀧彌太郎堀眞五郎へ委細之趣申聞せ今晚中に出足致し候様相授け申候間御勘渡銀早々相運ひ候様御授け可被遣候勿々已上

十一月十五日

尚々新五郎儀も先日榮太郎肥後へ被差越候御都合どもに無之は格別御沙汰振も有之間敷事歟に奉存候何分差向き候事に付御勘渡は早々相運候様御配意可被遣候以上

小五郎

○ 宇右衛門老臺

（山田宇右衛門）

（榮太郎は吉田榮太郎にて長藩士なり）

今日は御光來難有奉存候石川も彌明日着仕候由波多野着の時などには迎いに参り候もの返答持参仕候由私考にはおかしき事も御座候得ともいづれ拜顔にて無之ては難被申盡奉存候先は爲其拜呈候頓首已上

十一月十七日

小五郎

○ 木戸孝元文書卷二（文久二年十一月）

二百六十五



又兵衛様御内披

只今別番留守居所より持せ候に付乍失敬御先の披見仕候國事之爲非命之  
死を遂候者のみにあは幽囚之者までは及び申間敷哉に被考左候は眞之  
歎慮之儘に無之候間幽囚之者までも委細取調名前等認出候様被仰付度就  
あは此儘にあは文言不足歟と被相考申候

老兄御高案も可被爲在候得ども氣付之儘不取敢申上置候勿々頓首

十一月念六

廣寒

清旭老兄

〔清旭は中村九郎、廣寒は木戸孝元の號なり〕  
〔熊田は關藩熊田萬八〕

一筆致啓達候中川候一件追々及御注進候通に御坐候處去七日彼藩熊田其  
外之三件を以別紙之通書取にあ悔悟之次第被申出何分御赦免被仰付候様  
偏に歎願相成候

朝議に於ても御赦免被仰付度御主意に被相伺候處猶三藩申合存意内々申  
上候様との御事に付過る八日於會議處及評議候處中川候書取を以被申出  
候通實に悔悟之趣に付出格之御憐恤を以是迄之不行届御赦免被仰付關東  
には此度之參掛り被仰下置三藩よりも此由委曲江戸詰之者迄可申遣乍爾  
於

朝廷御赦免被仰付候を於關東各方有之候あは 朝威復古之折柄に付如何  
にも可有之且當地滞在勤 王之御用度相勤度被相願候共三藩周旋仕候義  
に付御無人にも無之自分働を以悔悟之驗訖度相顯候様可仕と被 仰出可  
然段旁評決之趣藤井良節關白殿下に罷出申上候然處先便中川候說解御滯  
坂相成候付あは 於其表も薩土衆御打合を 幕府に御達被置候様申進候  
趣も有之候處此度評決之次第 殿下に申上候付あは  
勅使も御滯留中旁追あ何と歟

朝廷より被仰付候あ可有之其節は於爰元内々手繕可及御注進候あ其内之

〔藤井良節は薩摩藩の人〕



義此内三藩より申達之趣を以於幕府御咎方等有之候は爰元にも申出と齟齬に相成候譯に付前斷御合被置候は、幕府の御都合も可有之被相考急飛脚差立候義に御坐候此段各様迄得御意候様彈正殿被申付候間筑前殿勅負殿被仰上候様にと存候恐惶謹言

赤川友之丞

桂 小五郎

山田宇右衛門

穴戸九郎兵衛

尙々政之助様の九郎兵衛より差越候内狀之内此度三藩申合一件申進候本書不及齟齬様御熟談可被下候

一 中川侯此度議奏方の被差出候御書面他藩之事とは乍申主人の右様之次第に至らせ偏に俗吏之不取計可惡義に御坐候  
一 都下無頼之徒不法多く町方共に三藩の心を置取締不行届に付三藩より

町方の右手相振は有之間敷哉と被仰聞候付別紙之通書取差出申候猶右書取之趣町方へ被仰下候彼方より三藩の示談仕候は、三藩よりも及右手相可申段をも口上にも申述候

一 中川侯東下之義是非不被致御決心之由御坐候此段は未幕府の御斷相成候義は無之候得共右之御合に有之候由彼藩人之咄に御坐候以上

周布政之助様

中村 九郎様

追啓

朝威復古之折柄に付如何にも有之候間此余於關東御咎方には不被及段議奏方より

勅使迄被仰進度と可申上筋に相見候得共夫迄行詰申上候は

朝廷の御差圖申上候様相當失敬に付差扣如何にも可有之被計申上候且又本文於



朝廷御赦免被仰付候を於關東御咎方有之は  
朝威復古之折柄に付如何にも可有之と申譯は關東之威權を被張るに當  
ると申意味に候旁之趣土州氣付筋汲取相認候義に付解兼候と相考及得  
頼候以上

○ 對州之義は絶海之孤島異國之渡口にして

皇國之出丸前備共可申要地に付往古より城壘烽候之設防人戍兵手厚備被  
爲置糧米之義も年分肥筑豊前後六州より致運轉嚴重之 御守備相立居候  
次第正史に相見其後對馬守先祖對州地頭職に補任せられ候以後も肥筑豊  
三前州之内數郡を領石高今にして貳拾萬石余領居候由藩屏之守備隨分に相整文永應永年間  
外夷拾余度之襲來手痛致防戰終に一度も勝利を失  
御國威を汚候義無御坐一州之守禦先つは致全備居候事之由御坐候得共其  
後追々國難無余義肥筑豊之舊領全手離麾下之諸士郎等不殘纔一島之内に

屏居致候様成行夫よりして年來之艱難中々以一朝一夕之故に無御坐數百  
年來之間事長之義に付多端不奉煩

御聽候右様之勢に漸々今日に押移候處元來不毛同様之土地柄一州之生  
穀一州三分之人口をも難得養肥筑之領處些少之收納米且海漁之浮利爲主  
處朝鮮國貿易之利潤を以米穀に換へ乍無念食を異邦に仔仔多年之間不束之  
取凌に有之候處時變に隨朝鮮貿易之道も斷絶同様之姿に至纔に今日家中  
之扶助撫育も手届兼候程之難迫役筋之者共種々心膽を碎候も眼前之急  
に被追守邊之實備難相立苦心此事に奉存候偶以前より備と相立候も多は  
有名無實之義に方今萬國之兵勢一變船砲計之時運に至候もは難取用筋  
而已申さは備向無之も同様之姿に如何にも寒心不安次第奉存候既に一  
昨年來外夷數度之碇泊國中之疲弊之素國體古今之情實を顯はし何地迄も  
御國威相立候様御英斷之御指揮追々 幕府に建白に及候得共今以何等之  
御沙汰も無御座然る處當時宇内之形勢一變攘夷御一決之



勅諭に至左候得は天下之人心今日より戦鬪之覺悟に不至候は難叶彌兵端を被開候に至候は第一其患害を請候は對州に相見爰に至六百年來之舊領君臣無守之大義に厚き身を以國に殉

神州之御爲宗氏之存亡相厭可申様無御坐州中人種之盡候限之何地迄も

御國威を不汚之覺悟勿論之儀に御坐候得共乍恐公を以

皇國之御爲相謀候に一州之微力士分勝算無覺束決有之間敷義なから萬々一對州之地醜類蹄を容るゝ之術与相成閩國之咽喉を扼し韓土之糧食に據り内地を席卷する之勢に至候は、忽天下之御一大事と罷成大切千萬之御事に奉存候右様樞要之地位に罷在武備手薄成は不及申平時と雖國本穀貨出入之算計不相中剩我國に生食を異邦へ仔つるは乍恐

神州之御名節

御國威にも相拘於大義難安は素り今にも異變相生一旦海路相塞候日に至候節は州中眼前飢餓之憂に迫候者必然之義に一國之命脉實に朝露之危

に等敷千載之遺憾此一義に奉存候是等全以前より勢之不得止被出る義に御坐候處果而貿易之盛衰に依州中平常之取凌も不手届程之國勢に及必竟從來國本不相立因循苟且今日に至候段不覺悟至極一國に主たる者可耻之限に候得共其耻辱を相包此上耻辱に勝り候一天下之御大事を引出候は乍恐

天朝に奉對不忠之至恐怖不少義奉存候就夫往時之過は如何様御譴責を奉蒙候も何分只今之姿に一日片時も難打過是非國體古今之情實貫徹致

し神州之大義御名節相立普天之下

皇化之及處寸地と雖渠之輕蔑を不請益御威德相顯此場對州之地位を以實備之算策を天下之士論に御打出被成下公明正大之御廟謨に従奉戴朝威候一國之人心致奮興海防之嚴備速に相立天下之先陣に相進候心を以此上

神州之御威光を不奉汚候様御賢明之御指揮奉蒙度伏る奉希上候



右は今度攘夷之

勅諭に依對州之情實御親藩之御譯を以 尊藩に 御取糺被仰出候付右  
願恐國體之大局口上書取奉添

御内聽候素微臣之私共何角と不容易義を奉申上候段千萬不堪恐怖候得  
共草野之微衷御明諒被成下書中不敬不遜之文言等可然御海恕被仰付被  
成下此場

皇國之御爲奉蒙

御配慮度幾重にも奉願上候御事

十一月

桂 小五郎

○  
（中根は越前藩中根親貞）

拜啓昨日は御光來難有奉謝候さては昨夕中根へ參り兼御咄之次第逐一  
申込迅速に何分之御答承知致し度段申候處早速承り合せ可及返答との事  
に御座候どうか中根之口氣にゐる思ひ通相運ひ候歟に被窺申候尤是は眞

之老兄にのみ申上候儀先々他には御噂無之様奉願候何と歟決答次第速に  
可申上候且又世子も今日は只今之處にゐるは御外出事無之由明日明後日は  
引つゝき御外出候由に御座候先は爲其勿々頓首九拜

初四

小五郎

○  
（大島友之允）

友之允様御直

○  
（兩大兄は  
大島友之允  
多田莊藏  
なるべし）

昨宵は萬失敬のみ申上奉恐縮候さては兩大兄今日御光來被成下候歟之御  
様子に被仰聞候と奉存候處今日は些差聞申候に付御斷申上度爲其得御意  
候勿々頓首九拜

十二月五日

尙々越邸之方も昨日承り合せ其上佐久間參り候に付尙又何分之返答差  
急候處昨今之處は幕廷も殊之外御取込にて其御評議にも至り不申候よ  
し

○  
（佐久間は  
佐久間佐兵衛）



勅使御立に相成候得は少しも静まり可申に付早速評議可仕との事に御坐候大抵十分に張込置申候十に九は氣遣有之間敷と奉存候得共未手にとり候事に無之候間斷然とは難申上候得とも向の口氣にては少しは安心仕候尙此余無油斷可申込候間左様（以下不明）

○  
（宛名及署名欠くも文久二年本戸孝九が對州藩の人に贈りものなるが如し）

拜啓今朝外出仕候節心事申上候通大抵吐露仕候得ども一時決局迄責詰候も却るいかゝと存候に付末段は申殘置申候明後日まてには相決し候見込に御坐候もし又其中事切迫候は、外に一好策相立置屢逃遁致させ申置べく候就るは逃遁處も序に周旋仕置へくと存申候其中第一策を飽まで盡力可仕候爲其勿々頓首九拜

十二月六日

木 圭

（來島又兵衛）

來島 老兄御直

○  
拜啓昨朝は御光來被成下候處折柄大混雜中に緩々拜話も不得仕諸事失敬のみ申上奉恐縮候さては其節御嘶も被成置候に付夕刻越前邸へ罷越候所昨日々

（中根は中根親實）

勅使御發輿に付春岳公にも品川迄御出被成中根其外要路之面々にも陪從に留守に付不得止一書相認置候も今朝重る罷越大夫嶋田近江と中根と一面會仕候付切迫之趣入々申込候處他は御嫌疑有之容易に御評決に相成兼候由申先日頃之趣とも些相違仕候に付甚當惑仕是非とも速に御運ひ相成候様飽迄申込置候得共誠に以掛念千萬に付一書認候も弊邸より罷出候都合に決着仕り就るは先達御館より直に御差出相成り、監察御國々不罷越候も御聞濟に相成候様との御願書御寫拜借仕候は、乍恐取捨仕候も相認可申と奉存候に付此ものに御渡方奉願上候一拜見仕候得は早速返上可仕に付別に御寫にはおよび不申候間御扣之分拜借奉願候先は爲其勿々



頓首九拜

十二月八日

尙々昨日失敬之段幾度君のよろしく御詫奉願候頓首

大島

多田 兩大兄急キ

木 圭

（大島友之  
尤多田莊  
藏）

一筆致啓達候

殿様益御機嫌克被遊御座

若殿様益御機嫌克昨九日江戸表御發途御旅中無御障御積り之通可被遊御  
上京恐悦至極奉存候

一此度

若殿様御途中御備之義武備專一にして虚飾を省精々實用に叶候様組立  
被仰付可然との詮議に及び御伺申上候處伺之通可然との御事に付先蹤

に不拘劍槍之專業衆を中堅隊として外に銃隊八隊其外在江戸之御人數  
を以可然被組合せ行軍之心得に御休泊も里數を縮め御道中諸沙汰都  
合別紙一と括り之通取計申候右は其御地え御伺之上御沙汰可相成義に  
候得共差掛り往返之間合無之候付爰許限り決着仕候義御座候間程克被  
仰上可被下候

一御前様御事來る廿五日可被遊御發與追々其御地より被仰越候御供人數  
之内差障等有之候付於爰元に繰合せ候沙汰可仕彌詮議詰之節可申進  
候間先右様御合置可被下候

一爰許御屋敷片付之義追々被仰越候趣も有之櫻田は御長屋計殘し置御殿  
并に内固屋共不殘解伏候且々御用ひ可相成分は御國へ差廻し可申左  
候而愛宕下より内談に御彼方御屋敷地御上地に被成候此御方御屋敷  
之内被成御借用度由申事に付櫻田御長屋之内を仕切候而愛宕下え御貸  
渡相成此御方には作事方一局被建置候可然と詮議仕候江戸詰之役

（櫻田は長  
藩櫻田邸な  
り）



には向後麻布御屋敷え一纏に相成居候は、邊鄙に付不自由之義は可有之候得共爰許之形勢是迄と違候義に付平日之便不便に不拘往々

上御出府之節御都合克き様兼々御覺悟肝要之事に御座候間役々孰も麻布え引越可被仰付と評議仕居候兩三日之内宍戸氏着府候は、猶又申談候而決着之上可申越候尤此御時節猶豫難成義故右大意御含置可被下於爰許には不日に取掛り其沙汰可仕と相考精々申談候義に御座候

（宍戸氏は  
六月九日兵  
衛）

一若殿様御上着之上は大徳寺境内黄梅院え暫時可被遊御滞之處九郎殿御出足前評議之通追ふは兵庫御備場え被成御移可然哉に付御陣屋地引渡之義爰許におゐて別番案文之通御老中え被仰立之義取計申候右に付大坂方え被仰越彼地において町御奉行え申立候様可被成御沙汰候爰許評議之趣は九郎殿委曲御承知に付不具候

（兵庫御備  
場は長藩の  
兵庫警衛地  
なり）

一御預地之義先年相州にも彼是御手煩有之猶兵庫之義は御代官所膏油之地に付御預地に相成候ふは於御代官所に大きに迷惑被仕候由に付決

る差障を可被申立と相見候故先被成御願間敷との御事に先年は打捨置候得とも當節之勢に御備場被成御持續候得は御預地に相成不申候ふは平日諸沙汰御不便利のみにて行届不申異變之節は猶更不都合之義に御座候間少々之御手煩には不被相拘御請場一圓御預地に被成御願取候ふ農兵御取立相成異變之御手當精々御手厚く被仰付置候ふ可然御事に候半と評議仕

若殿様え別番之通一應御伺申上候得共猶又爲念申進候間篤と御評議之上御沙汰之趣早々被仰越可被下候

一對州御隠居御家督に付御規格有之御國目付可被差下との趣於對州は御家老以下一統甚當惑之様子に付難被捨置候間別番案文之通被仰立候ふ可然と致評議

若殿様及 御聞其取計仕候右は

御名元之御書附に仕立候ふ可然筋に候得共差掛り候義御伺を不經取計



候故態と 御名内之御書面にして差出申候旁之趣御聞濟被成下候様御  
取計可被下候

右之外昨今相變義も無御座候日載之寫差越候間御一覽可被下候猶追々可  
得御意候恐惶謹言

十二月

桂 小五郎

來島又兵衛

尙々兩三日之内宍戸氏參着候は、爰許諸事申談委曲申進候可御座  
候九郎殿御旅中決之御順克御差急き追付御上着候半と欣然之御事に存  
候以上

山田宇右衛門様

中村 九郎様

(此書は周布政之助の自筆にして木戸孝允來島又兵衛に代りて山田宇右衛門中村九郎の二人に贈りたるものなり)

(杉徳輔は長藩士にて後之杉孫七郎)  
(竹内下野守は幕吏竹内下野守保徳)

弊藩杉徳輔と申者昨酉冬幕より歐羅巴諸國に被差越候使節竹内下野守一  
建中に相加り罷越過る十一日歸

朝仕候右之者歐羅巴に來亥年佛夷朝鮮の兵艦を差向己が領轄と致さん  
事を相謀り且朝鮮之柔弱を蔑視し兵卒さへ差向候得は干戈に血ぬらずし  
て己が有と相成候なぞ申誇居候由専ら風聞に承知仕候趣相話申候朝鮮に  
事あり候節は元より

神州にも可關係之義に候得とも尊藩は其中格別之御近境にも有之候に付  
不分明之話には候得ども不取敢入御耳置申候頓首

戊ノ十二月十四日

孝 允

(此書は宛名を關く對州藩大島友之九に贈りたるものなるべし)

拜啓彌

御壯榮御忠勤奉大賀候さては一昨日寶曆度對州の御沙汰書之寫差出候様



被仰越候に付早速彼藩へ申遣候處別番持參仕候此外には格別御沙汰積も  
無御坐由申候寶曆度は別番之趣にては朝鮮信使之義に御運ひに相成候  
事と被窺申候此度は攘夷之御布告も有之候に就るは信使とは輕重緩急之  
差別申上候迄も無之事に付何卒速に歎願之通被仰付被下候様奉願候彼藩  
も甚切迫に速に御所分相つき不申るは甚當惑仕候今日登門申上候而直  
に委細申上候而御様子も可奉伺と奉存候所取込居候付御無沙汰申上候間  
御容赦奉願上候御多務中千萬奉恐入候得共自然御隙も被爲在候は、御一  
答奉願度候先は爲其勿々頓首九拜

十二月十三日

小五郎

(中根親負)

韌負 様御親拆

(武田は武田耕雲齋にて水戸の人なり)

御答書奉拜見候然は、先生且武田君始明日御發途之御様子彼是御多務と  
奉恐察候就るは何分俄之御事に付拜話も得仕らず遺憾萬々奉存候乍去其

(大場は大場一眞齋にて水戸の人なり)

中京坂之中に拜鳳を可奉得と奉存候さては今朝も申上候通土老公も彌  
正月五日七日之間には御發駕之よし就るは兼而御懇切に被仰聞候一條相  
成義に御座候は、御盡力奉願度先日申上候通成丈は修理を相立度就る  
は一應彼より一言有之候方實に仕合申候來春と申候而も今四七日にて何  
歟切迫に罷居申候間乍恐御高察被成下大場君にも訖度被仰置候様奉願候  
左候は、其中御様子相窺可申候先は右申上度其中時下別而御自愛專一に  
奉存候勿々頓首百拜

十二月念三

尙々乍慮外大野氏へも可然御致聲奉願上候頓首

木尾先生拜呈

木圭

(木尾は梶清右衛門にて水戸の人なり)

月迫御繁多奉察候借昨日は御書狀難有奉存候昨日中仲殿に可參と存候處  
風邪思敷無之故無音仕候今日推し是非參り候覺悟に御坐候先は爲其

木戸孝元文書卷二 (文久二年十二月)

二百八十五



申上置候敬白

十二月廿九日

尙々御序尊大人の可然奉願候先は早々拜

龜之進様貴下

小五郎拜

（來島龜之進）

拜啓

御發輿前後之儀は別昏御用狀を以申上候間相略申候

老兄御出立後も引つゝき好天氣に付御途中も無御障順々御運ひと奉察候

一老兄御立後過る二日

儲公御登城之節之上意書き閣老より御落手被遊候御復命三ヶ條之御書

面赦宥付立以上三通

御發輿前に早く新御殿へ差出候様との事に付詮議仕候處更に不相見山

田翁より承り候得は老兄御持登りの由に於<sub>下</sub>積も無之候間處々相尋候處

（山田翁は山田宇右衛門）

神田源八寫し置候に付別に相認候<sub>を</sub>差出候處

儲公甚御不平之御様子に於折角 御自分様に御持登被遊候兼々御趣意

に被爲在候由之處御伺なしにて老兄御持登り被成候故いかにも御残念

に被 思食候由相伺候に付早速老兄へ申越候<sub>を</sub>老兄より

儲公御上着迄に 御手元被差出候様弟より可申越候間左様被仰上被下

候様相頼置候に付何卒右三通御印封被成候<sub>を</sub>速に侍御番長之内へ御届

け可然と奉存候

一先日横濱一擧之せつ

儲公御出馬被遊候<sub>を</sub>御直に御鎮靜被遊候<sub>を</sub>無事に相濟重疊事に御座候

處其已後右人數之内より承知仕候得は容堂公之命を受候歎土よりも大

分人數被差出候<sub>を</sub>趣次第鎮靜致させ若も不得止勢に御座候得は伏水之

所置にも及候歎之様子有之候由左候得は忽雙方讎敵之勢と相成申候一

體此往之所是より他藩へ信義を失ひ候<sub>を</sub>は不相濟候得共遂には獨立之



了簡に決着仕居不申は所詮事業も舉り申間敷就は御國も今日より割據之覺悟をきめ防長を一天地と相心得候速に用意不仕は眞に他日勤

（麻翁は周布政之助）  
（高晋は高杉晋作）

王之決戦も六つヶ敷と奉存候右に付麻翁も一と通り御咎被仰付候は、於御國御改革之大將に致し高晋等歸國之上麻田翁之先に立候必死に盡力仕候は、速に成就可仕候もしも此義容易に相運兼候は、麻翁と共に高晋弟等も一先亡命なりとも仕一周旋可仕歟と此内竊に申談じ候處高晋ももとより否は無之候老兄如何被思召候哉速に御答奉願候兎の道右兩條之外手段無之と愚考仕候御答相伺候弟も去就相決し可申候自然御運ひ相つき麻翁も速に歸國相成候都合に御見込相着候は、弟は先へ上京仕麻翁高晋<sup>一同</sup>早々出足致し候様決着仕置申へく候弟も上京仕候都合に相決候は、何卒是非とも一先暫時歸國相成候様兼御願仕置候通御配慮奉願候對州御國目付一條も老兄御立後越邸へ罷越候催促仕候

（大場一眞  
齊武田耕雲  
齊岡田確翁  
は皆水戸の  
人なり）

所始と違ひ容易に相運ひ兼候歟之趣に於彼一藩一統大に當惑仕已に御書面を以此御方より被仰立候歟に相決し候處又々昨今之様子にては近々御評決にも相成候歟に被伺申候監察當り之俗論と被相察申候何分にも此上速に相運候様盡力可仕候水府も大場武田岡田等出府致し候得共以前の要路未一掃不仕候故擁閉甚しく大場は未一度も君へ謁し不申由弟も八日に罷越候約束致し置候處右故六七日見合吳候様申越候其に御推察可被遣候尤其中擁閉は打破り可申候いつれ今度は尋常には相濟不申武田等も決心罷居候由に御座候御立前委細御咄申置候水府上洛陪從之議速に相運候様御上着之上は御周旋可被遣候尤幕へ漏候は彼藩甚迷惑の様子に付御含可被遣候且又横濱へ土州より内々人數被差出候節義も明らさまの事には無之晋作玄瑞より内々承知致し候位之事に付必公然とは御咄御用捨可被遣候

（是ハ附箋此書狀心事悉吐露仕候間必他人えは御轉示被下間敷様奉願候頓首



（安翁は共  
戸九郎兵衛）

認候後昨夜安翁着に付麻翁所に弟と三人相會し麻翁身上之御處致も安翁被相話且話中に公之難有き思召も被爲在候歟之御様子に被相窺候處御立後緩々麻翁と對話仕候處甚切逼に所詮尋常に歸國被致候氣色不相見昨夜も只管落涙のみに安翁も流涕ながら被相話昨夜は其故半話に委細は盡き不申候一體先日来之様子甚氣遣敷存申候間弟は決心仕候も本文之通申上候處昨夜之様子には一旦之歸國いかにも六つケ敷被相窺申候未安翁へも得と相談し不申候得ども兎に角爰許に嚴罰被仰付赦免之上歸國と申譯には御詮議相成申間敷哉左候得ば無此上元來容堂公も格別立服被致候譯も無之十一月九日三條姉小路兩卿へ御相對之節容堂公被仰候趣委細日載に有之老兄之御筆と相見候に付老兄にも御承知之事に可有之其に

「勅諭御請之次第容堂公御答には攘夷は勿論決定策略期限は如何程御促有之候とも急速難定猶又御親兵之義は少々見込も有之候得ども未考定不得仕に付追可申上」と有之申候且先日土人より承り候得は勅答前日迄は御日勤に其後は御登城も日々は無之と申候左候得は元より此度之

勅答も始より御相談に有之候は必然之事に可有之左候も如此度因循之次第には容堂公丸にちやかさぬにも無之是よりも格別おそれ候事も有之間敷就は麻翁之御所致も大概に可然爰許に被罰候は、速に事も相運ひ候も必竟は御國之爲によろしく老兄如何被思召候哉早々御決答奉願候弟も曖昧には出足も相成兼申候に付速に如何と歟相決し度奉存候拜

○（此書宛名月日等を闕く、文久二年十二月木戸孝九が松島剛藏に贈りたるものなるべし）

尚々一人亡命別番にて御承知可被下候也

飛脚差返候節は僕醉後將就枕之時にて最前御出願之御文言と覺不申候付



不得止一時揮醉筆其後前非を悟候も重る一書を呈上仕候最早御覽被下候  
哉人世間萬事誠實之外え無御坐候間御互に面接不仕候共萬御察可被下候  
只今福か私をすかし申候是亦情也前文は義にて御坐候付不能申上とは存  
候得とも御答旁如此御坐候草々奉復

則

下々 麻田 老臺御直拆

上々 木 圭

木戸孝允文書 卷三 文久三年



木戸孝允文書卷三 文久三年

何分之義鳥渡御聞せ奉願上候

松屋老翁急キ

木 圭

(松屋は付田次郎三郎なり)

(大島は大島友之允樋口は樋口謙之亮にて皆對州藩の人なり)

拜啓直様双林寺御旅館へ罷出候處來る十五日公彌御發駕のよしに外におゐて御酒被下候との御事故いつれの處かと存候處井筒へ被誘不得止次第に參り申于時は是非々々老兄にも大坂迄被誘必々御出かけ被成下候様大島樋口より之頼み付不取敢申上候間早々御出かけ奉待候御留守には御手付一人へ得と被仰置候は、御用有之次第相知せ可申候間左様御取計らひ被成候亦早々御出かけ奉待候頓首

○

先以御壯榮に御忠勤奉大賀候御國も色々御配慮之御事のみ兎角有之候御



様子實に奉想像候愚見は逐々申上候通別に建言仕候ほどの事も無之於私  
は幾應も彼通に徹底仕候へかしと奉祈念候百度愚考仕候も斷然  
上に御直裁被遊候之思召に無之は此往は決る手段無之無左は只々御  
國之御危急に係り候事と奉存候乍去彼儀幾應にも御内密に奉願上候無左  
は同しく下々疑を益し候のみならず却る

(陸麻は陸  
山麻田の二  
人なり)

君威を失し候方に相成不相濟事に御坐候且又爰元之情實は別紙に有之儘  
申上候御熟覽被遣候 陸麻二翁 (二三字缺) 御渡し可見遣 (二三字缺) 少々之晴 (二三字缺)

(因は因州  
藩なり)

中々當には相成不申實に姦邪縱橫往來油斷は相成不申候此往は御國も何  
分疎に不失様無之は不相叶天下頼と相成候諸侯も中々無之必竟  
皇國之御爲に付幾應にも因とは進退尙此往之御所置等に亦も  
思召に亦是非御熟談被爲在候様有之是も斷然  
上之思召に無之は被行不申候此餘疎に失し候は實に取返し様無之候  
○武器早々相調事と御手當事之中に亦も逐々申上候通土着論等之事土着

兵之事等は

御直に御世話無之は眞に用はなし不申候先は爲其申上候勿々頓首九拜

二月十三日

尙々木梨へ此趣御直に御嘶可被遣候此書は早晚之通御投火奉願上候拜

登 人様

五 郎

國之介様御密披

(木梨は木  
梨平之進に  
て長藩士な  
り)  
(登人は毛  
利登人國之  
介は大和國  
藩士なり)

昨日は御答被成遣奉拜誦實に  
老大兄御深意不覺落涙之仕合御座候暢夫之事もかくまで御盡し被成候に  
付亦元より得と申通じ不申亦相濟不申候去乍弟同道と申候事は些相成兼  
申候刀仕立申付有之候由に付調ひ不申亦尋常之行とも違ひ候故發途出  
來兼申候に付調ひ次第出足可致と申居候然處水人も切迫に罷居候間同勢  
支度相と、の候得は三日にても四日に亦も一時も速に出足不致亦は自



(暢夫は高杉晋作志聞は志道附多なり)

然其間に意外之事出来仕候はかく迄長州家之御世話と相成も水の泡と相成申候のみならず遺憾無此上事に御座候暢夫も老大兄志聞へも其議を論じ堅め置候得は此上相違は有之間敷と相考申候弟も前後進退之間に實に當惑仕候

○水人之金之儀承知仕候此ものへ御渡し方可被遣候先は爲其勿々尤水人に其中老兄にも一應御逢置可被遣候御同道に西上と相成候得は否無之候得ども御運ひ相成候は是非御面會可被成遣候頓首九拜

二月二十

尙々萬々申上兼候得ども弟も意外とも不被申赤面之至に御座候得とも二十金余之無之は出立出来兼其とて公金を費し候譯は無之是迄莫太に頂戴も仕居實に年武借に不苦候間三十金ほど拜借は相成間敷哉歸り候故少々かけとりも参り候哉相調候儀に御座候得ば水人へ渡し候内三十金私借用致し早速水人へ重私より残り三十金相渡し可申候様

(草山は來島又兵衛)

仕候いか、哉水人も諸支度入用故出立までとの拂方之由に被察申候御相談旁申上候御一答奉願候恐懼々々

草山老大兄御直拆

松 菊

(岡義右衛門なり)

朶雲拜見仕候過日は御光來緩々御高話承り本懷此事に御坐候且又書類態々御持せ難有奉存候尙拜見候御考をも承り可申候金紙之間云々實に爲天下苦心痛按之至に御坐候何卒維持之手段必至無之は不相成事と奉存候草々頓首

二月二十二日

孝

義 老 兄内答

(中山公子は中山忠光なり)  
(久坂氏は久坂義助)

御手紙奉拜誦候中山公子昨夜も余程御切迫之御様子に付弟も御門前まで罷出候處最早老兄も久坂氏御出に相成居候ゆへ差扣申候實に御暴動も數

木戸孝九文書卷三 (文久三年二月)

二百九十七



度之御事に付御付添之面々御断申出候も無是非次第早々御引取を相願候も不本意に候得とも不得止義に付御評決相成候は、如仰一人中山卿へ罷出不申亦は相濟間敷最初より佐々木寺島氏父子御一件に付候亦は始終中山卿へ罷出候に付佐々木寺島氏之内にてはいか、哉弟も昨夜來半身別て痛み不自由千萬之仕合に御座候間今夕々休息仕候亦保養仕度に付過刻清旭翁の委細相頼候て申越候位之事に御座候尤推て中山卿へ罷出候位之事は相叶申候に付弟罷出候方可然候は、無御容赦今一應被仰聞候様奉願候先は爲其勿々奉復

初二

尙々根來殿上着に相成候は、其中弟も面會可仕候得共本文通之仕合に付今日は無音仕候間自然御逢も御座候は、乍失敬よろしく御致意奉願候拜

村田次郎 三郎なり

木 圭

(根來は根來上總にて長藩重臣なり)

(清旭は中村九郎なり)

(佐々木は佐々木寺島三郎なり)

(村田次郎三郎なり)

(麻田は麻田公輔佐々木は佐々木男也なり)

拜啓

兩兄御壯榮奉大賀候借先夜粗御嘶仕候越前公賢論は麻田の篤と熟談仕見候心得御座候間佐々木君途中迄御出に相成候は、まづ此論は御見合兼て之御持論のみ御示し被成候方可然哉と奉存候一とつ夏を誰れも彼れも侃々と申候も却て徹底薄き事も有之申候成否は兎も角も古人も總て事を施し候に人に窮する所の活路を開き候て成就致し候氣味多く申迄も無之頓に御承知之事には御座候得ども質論御見合可申上ため奉呈候勿々頓首拜

初七

尙々時山は可然御致聲是願候拜

久 兩兄御内披

允 拜

(時山は時山直八にて長藩士なり) (久は久坂義助佐々木男也)



若殿様益御機嫌能昨八日四ツ時之御供揃にて大坂御屋敷下より御乗船今  
九日曉七ツ時過伏見御屋敷御着被遊御小休直様同所 御發駕晝九ツ時過  
河原町御屋敷の御機嫌能被遊  
御着恐悅至極奉存候右御注進爲可申上之如此御座候由  
面書之通令承知恐々謹言

三月廿一日

(此書は文久三年三月九日木戸孝元が周布政之助村田次郎  
三郎來島又兵衛と連署して益田彈正に贈りたるものなり)

今日御歸邸のよし思之外之御運ひ重疊に奉存候

(中山忠光)  
一 中山卿一件相運御家來二人被差越候付庄藏右報知旁差返申候其に付御  
親兵一條も返答におよひ置申候周布藤内一條御懸引丸奉願候御届書は  
二 通相認置神村新七へ相渡置候弟は今晚は少々他藩に打合有之申候何  
分にも諸事御願申上候御留守中無事今日は殊之外多用に御座候先は

(周布藤内  
神村新七  
皆長藩士な  
り)

爲其勿々九拜

十八日

村田 老兄御直拆

木 圭

(村田次郎  
三郎)

攝海戰守御備

- 一 大坂御城外曲輪御舊復淀川筋を御城内の取込豊公之規模一倍天<sup>大カ</sup>に相成候様に被仰付四面共砲臺築造大砲數十門御備置事
- 一 近江美濃丹波其外海無之國々人數不殘大坂の出張之事
- 一 尼ヶ崎岸和田兩城は坂城之兩翼に付有懸り之城より外の押廻し新規に壕を掘礮臺を築都合坂城之規則にならひ攝州之人數は尼ヶ崎泉州之人數岸和田の籠城之事
- 一 八幡山崎の堡塞御取建事
- 一 堺の大砲貳三百門懸之砲臺急に御築かせ和州之人數出張被仰付事



一安治川木津川筋口より山崎八幡之堡塞迄砲臺連續に築造被仰付事  
 一兵庫堺之町人共急に京都の妻子引續れ立除き候様御沙汰事  
 一紀州阿州淡路之三ヶ所の堂上方御一人宛御下向右家々之守備御見分委細圖面を以て可被達  
 叡聞事  
 一沿海之國々土着之士民を以其地利に據り戰守之策を建候而奔命に勞れざる様可被仰付事  
 一兵庫堺其外兩懸之宜き港々の軍艦を繋ぎ置候様可被仰付事  
 一將軍御歸府にては候カ  
 神州服心之京都空虛に相成御備は決る相立不申是誠に  
 神州安危存亡之境に付今一應  
 朝議被爲在候様志士一統奉懇願候尾紀水三家之内滯京候共萬端之號令將軍家御同様には決る行届兼可申と奉考候

神州之御爲獻言仕儀に御座候に付何卒被聞召分可被下候以上

癸亥三月廿二日

右將軍急に御歸府之沙汰有之候に付不得止兼々御持論之旨私共申談し書付相調學習院に清太郎關白殿へ小五郎中川宮へ男也は三條殿の忠三郎姉小路殿の徳輔持參今日は總御參内に付右五通共直に御銘々より御所へ御差出に相成候間此段被及御聞可被下候以上

初 負

清太郎

彦 七

政之助

次郎三郎

又兵衛

小五郎

三百三



德 輔

宗右衛門

男 也

忠三郎

直 八

彌次郎

右は内輪日記之寫にて御座候間其御考で御推讀可被成候以上

○

彌御壯榮御忠勤奉大賀候さて昨夜飛脚を以申上候通

儲公九日三十日兩日之中には是非御發途被爲遊候御様子に付

御上京之上は御歸國と御備場御斷之ニケ條は何分にも徹底不仕は不相

成御事と奉存候其中定る清々杉徳佐男三條姉小路兩卿にも無抜目逐々申

込候事と奉存候尤御備場一件は此度將軍重る滯京と相決し候折柄に無之

ゐは又々迂遠に相成候歟も難計奉存候和田岬臺場と申候も眞の形のみに  
ゐ始終實戰之用に立候ものには決る無之様被相窺申候當節勝麟太郎も歸  
坂致し居候由に付様子次第歸り掛け相尋候ゐ彼等之見込も承知致し度と  
存居申候所詮如此規模にゐは攝海眞之實備は萬々相立不申候近海にゐ獨  
且々備相立居候は淡州のみにゐ幕はもとより泉攝播之諸侯方にも一陪臣  
稻田に下る事數等至今日實に顔色無之次第に御座候如稻田は陪臣とは乍  
申

天朝にも格別之思召を以御賞譽も有之候は、當國は元より近國諸侯も爲  
是に少しは目も覺め可申候淡州之義は今一入探索仕候ゐ上京之上は一策  
有之候事に付委細は拜鳳可申上候弟も昨日差遣し候人追付毛利も引返し  
候得は今一應論し詰候ゐ直に歸京可仕左候得ば今度は毛利も上京には不  
及候自然毛利推ゐ上京に相成候得は昨夜  
御前會議にゐ



御上京は御内決も相成居候に付今一應思召を伺候る明日にも出足可仕と奉存候先は任幸便一筆奉呈候勿々頓首九拜

三月廿六

小五郎

(大和國之  
介志道聞  
多波多野金  
吾)

尙々大和志道波多野等も大に勉強御備向等も追々手を盡し無用之義段々相省き稽古事等引立候様頻に苦心仕居實に感心仕候○癸亥丸は兄部庚申丸は兵庫へ安着仕居候○元より御疎は有之間敷候得ども御大酒は必御用捨奉願候勿々頓首

(麻田公輔)

麻田老臺

先以

御兩殿様益御機嫌能被遊御座恐悦至極に奉存候將又各位彌御壯榮に御忠勤奉賀候扱は儲公御發途後も京都の事情一日百變不穩候義に付右御注進として當御陣屋まで被差越申候

一去る十八日將軍參 内有之滯京の義御請有之候に付就るは早速攝海防禦の實備等よりして諸事實着に手を被着候事と存候中去る廿一日夜一橋并閣老等殿下へ罷出九ツ時罷歸候由の處俄 將軍發途と申風説有之いかにも難被爲信事と存候得共頻に風聞致し候に付聞合せ候處全實事にお横濱英夷の事情切迫に付願捨置候る歸府と相決し候由の處 上洛後も實事と申るは一ツも舉り不申驚のみ攘夷々と申現に攝海防禦等に亦も井伊安藤等當職頃諸侯方の力を削き候爲に一時の暴威を以申達候事にお是なりにては百年相待候とも更に實備の相立候目途も無之實に至今日候るは是等の義第一に御改革無之るは不相成の處其邊の義今日迄更に何事も無之此儘にお歸府有之候るは再機會は決る無之候間別紙を以殿下始御役向へ罷出申候有志の者も夜中殿下へ罷出御尋申上候處最早其節は將軍も又々滯京と一決相成申候幕も内輪不容易混雜の趣に相聞申候尾水兩家にお且々維持仕居申候



一儲公御歸國の御願も有之形勢に付強るは難被申上候得共現に攘夷期限等も相迫り候に付るは御自國御防禦肝要の御事に御座候處未御備場御免無之内は人數等出張被仰付置不申るは不相成候得共 儲公には一旦御歸國被遊候義御急務の御事に付追々三條姉小路兩卿へも事實申上置候處此度別紙寫之通被仰出候に付杉徳輔被差歸歸り掛け岩國へも罷出候る早々御上京相成候義申上候様被仰付候

一御備場へも只今之通御出陣被遊居候上は勢不得止節は御人數等も御不足には御座候得共御決戰の 思召に其節の覺悟一統へも一入嚴重に被仰聞居候へ共更に實備も無之數十里の海岸些少の人數を以防禦致し始終の御決算御目途も難相立を御承知被爲在なから空敷御引請被爲成其に 朝廷にも御安堵被遊候と申御事に恐多き御事に付此度御上京被遊攝海現場の形勢 朝廷へも被仰上當幕府へも 御直に被仰込候る是非御備場の義は御免相成候様被爲遊度自然因循にて及遅延萬一御

備場御引受被爲成候都合に御座候得は當國の兵食丸に御任せに無之るま眞の實備相立候目途無之に付此段十分に被仰込幕分明の令被聞召候思召に御座候

右の外申上度義も有之候へとも筆頭に盡しかたく日載をも御覽可被下候委細の義は徳輔歸國の上逐一御承知可被成候爲其如此御座候由端書に癸亥九廿三日夜兄部庚申九廿四日晝兵庫へ着船仕候由

○ (此書は文久三年三月二十六日木戸孝九が安戸九郎兵衛山田宇右衛門中村九郎に贈りたるものなり)

(清水氏は清水清太郎にて長藩士なり)  
(眞木翁は眞木和泉)

其後直に清水氏同道眞木翁相尋殿下より被仰聞候一條相嘶候處翁昨日御役向より奉承知候次第と相違致し候に付今晚豊岡卿へ罷出候る御尋申上候由左候は、明日は何分之義相分り可申候且忠光様御義昨日殿下へ被仰上候處大に御當惑被爲成候邊之模様も相談じ置いづれ是なりにては難被差置は當然之事に元より晝後清水氏同道に弟野々宮卿に罷出委細之



(清旭翁は  
中村九郎)

趣言上可仕候得ども其中翁にも是非周旋被下候御役向へ得と御合點之入候様被仰上度趣も相嘶候處同意に早速盡力有之候よしに御座候委細清旭翁にも直に可申談と存候得共其中御面會被成候は、此段御返じ置被遣候様奉願候頓首九拜

念九

尙々只今來客有之精進に格別肴も無之そふめん御□と御座候は、頂戴仕度奉存候拜

(村田次郎  
三郎)

松屋老兄御直

木 圭

昨日は御答被成遣奉拜誦實に  
老大兄之御深意不覺落涙之仕合に御坐候暢夫之事もかくまで御盡し被成候に付元より彼にも得と申通申すは相濟不申候乍去弟同道と申候事は差迫り候事に付相成間敷彼も覺悟を致し候登り候事に付早速刀も白

和泉屋敷  
金の申付候由(以下欠)

(此書は文久三年三月木戸孝九が麻田公輔に贈りたる書翰草案の断片なり)

(老中水野  
和泉守忠  
精)

一筆致啓達候三月晦日水野和泉守殿より別帑御達有之度就るは三家之人數出張之上は御備場御引渡可相成之處三家催相に引請に相成候哉又は拾里及之海岸三家に御割付に相成候哉未其邊之儀相しれ不申候間於其御地町奉行御聞繕被成候諸事無御手拔御備場の御注進被成候様にと存候恐惶謹言

四月朔日

桂 小五郎

村田次郎三郎

周布政之助

北條瀬兵衛様

佐久間佐兵衛様



此度之儀云

思召之旨有之庚申丸え被爲

召癸亥丸は御乗替に被 仰付候就るは癸亥丸え御供之内重立候者乗組に被 仰付候付幾人乗組相成候哉御取調らへ被請候る早々被仰越可被下候 尙又松島剛藏えは庚申丸え被爲

召候段御授け被成御付之面々幾人乗組相成候哉取調らへ候る早々申越候 様是又御授け可被成候左候は、御船割等も早速御詮議可相成と存候御乗 船之場處は兵庫と御決定に付左様御承知被成候る萬端無御手拔御駈引可 被成候以上

四月朔日

小五郎

次郎三郎

政之助

(來島又兵衛)

又兵衛様

(久坂和尚は久坂義助) (八新は京都の八新樓)

久坂和尚余程窮迫之由に而今夕八新より攻よせ大に當惑仕候是迄いか様 拜借等之事相成居候哉は存不申候得共只今五圓はと拜借は相叶申間敷候 哉相成儀御座候は、御配意奉願候頓首九拜

四月二日

(麻田公輔 村田次郎三郎)

麻田 泥 老大兄 村田

木雲

圭

老兄

乃

御表書之趣麻翁より唯今五圓相渡候由決る右行違に相成候哉と存候何も 拜青縷々可申上候若も其余候は、又々可被仰遣候い上

別番御列附之人數は從京都御供致し候面々に御座候間明日夕より河原



町御屋敷に罷越候様其向々の御沙汰可被成候以上

四月九日

還幸より交代致し候面々直に八幡に罷越候不苦候以上

波多野金吾様

桂 小五郎

(波多野金吾は後の廣澤兵助)

少々御嘶仕度儀有之候處今晚はいかゝ被爲成候哉鳥渡相窺度奉存候勿々頓首

十二日

麻田 様御直

桂

敬承下り掛け御宿立寄可申候以上

桂 様

麻田

(敬承云々以下は麻田公輔自筆なり)

先達る御親兵引當として被差殘候人柄詮議之義御引受被成候御撰舉被

成候都合御座候處いかゝ相成候哉御立も相成り候事に御座候得は旁差急き候に付其御含みに御一定之處早々被仰越可被下候已上

四月十五日

尙々御疎は元より無之御事に候得共兎も角も御親兵引當之面々柔弱連のに萬一之せつ不相濟候間爲念申上候以上

波多野金吾様急キ

桂 小五郎

御答書奉拜誦候今朝清水清太郎便りに申上通獻金一條半途に於今日中には三條卿より何分之義可被仰聞候間委曲承知仕候早速罷出可申候昨日已來無余義事とは乍申甚御待せ仕萬々奉恐入候何れ拜鳳之上御斷可申上候爲其勿々頓首九拜

四月廿三日

尙々横濱夷艦も大方退帆逐々攝海へ罷越候風説頻に有之候よし承り及



(麻田公輔  
即ち周布政  
之助なり)

申候以上

麻田大兄

松菊生

態々御投書被成下逐一奉拜誦候獻金論も些六ヶ敷然し其には尤之御議論有之申候いづれ拜顔の上ならては盡き不申今少々半途之事も有之候間相濟せ次第明朝は出足仕候昨朝已來三條卿と學習院え度々被呼出候には隨分草臥れ申候然し乍恐先日已來朝議は大に相しまり候様被奉窺誠に難有事に奉存候昨今之時情は明日束可申上候先は爲其勿々頓首九拜

四月廿三日

麻田老兄

奉復

廣寒

飛脚今朝歸邸御答書并御懇願書草按等逐一奉拜見候昨夜も三條卿に罷出

(麻田公輔)

候處獻金一條昨日も御多務之御様子に御評決済に相成不申候昨朝も入々申上置候得とも何歟御氣兼も有之候歟之御様子に被窺申候御懇願本書今朝相認候而參殿仕是非とも今日中には被遂御許容候様達可奉願候昨朝之御口氣は甚事改り候而被仰聞候得共折角之思召故此度強而御願被成置候得は中興

朝貢之道も相立追々列藩よりも相願自ら乍恐朝廷之御力にも相成候御事奉存候兎に角御許容相成次第罷出候積りに御座候間左様御承知可被遣候爲其勿々頓首拜

四月廿三日

麻田老臺御直拆

木圭

(麻田公輔)

亂筆御推覽

昨日

木戸孝九文書卷三 (文久三年四月)



也（佐々木男）

勅使として姉小路卿御下坂に付男也弟も陪從の都合に昨日に足可仕の處半途の義有之只様延引尤男也は今極朝出足弟も只今門を出掛け候處浪華よりの御書到來に付男也へ相當り候得共急事と推察仕不取敢披見仕候處いかにも難差置義に付早速松輔をよひ委細逐一申含吉村氏の書翰相持せ河上氏にも精々周旋致候様可申論段申聞置候御書翰の旨趣は松輔に相合せ我藩より松輔へ肩衣を着せ三條公へも差出申候余り俄に騒き立候も却あいかゝ故得と申込置候も主意相貫候得はよろしくに付委細（吉村は土州藩の吉村寅太郎なるへし）の松輔へ被答候處得と合點致候様必氣遣は無之候間御安意可被成候此余彼邸奸吏とも奸策をほとこし候得は元より斷然と御處致無之は終に目途相立不申候勿々奉復

四月廿四日朝

尙々弟も下坂致候都合故とに角一應下坂不仕は不相成候得共爰元も至る無人其上昨今は彼是用向有之候付様子次第浪華滯留不仕候も歸京

可仕とも存申候委細拜眉の上可申盡候拜

忠 三 兄

五 郎

寺島忠三

殿様益御機嫌能被遊御座

若殿様益御機嫌能過る廿一日被遊 御發駕恐悅至極奉存候

一先日委細日載に相認得御意候通り攘夷期限來月十日に一決相成候就るは過日坊城卿より御達有之候處尙又別紙從幕府言上相成候趣一昨廿三日坊城卿より御達相成申候

幕府よりも御仰之次第列藩に布告相成候都合に候得とも其中

大樹公下坂に付因循に相成居申兎の道早々布告無之は不相濟事に候一 大樹公下坂攝海御見分に付姉小路卿

勅使として御下坂被爲成候に付御當家并土肥三藩より警衛として七人宛差出候様三條卿より御達有之候付別紙付立之人數御警衛として被差



出申候佐々木男也小五郎御列外に被召連候との御事に昨廿四日下坂致し申候姉小路卿には廿三日御發駕今廿五日大坂川口因州家臺場等御覽被遊蒸氣船にて兵庫の御着御一泊に相成候る明朝摩耶山の御登り夫より同蒸氣船に淡紀の海岸御巡見被遊堺にて御止宿の御都合に御座候

一 獻金一條御書面は御請込相成候得共現金上納は暫猶餘仕候様にとの御事に御座候委細は麻翁歸國之上御承知可被下候其に付は

朝廷も難有思召被爲在候事に御座候乍然

御兩殿様

朝貢之道相立候様にとの

思召は徹上仕

御満足に被

思召候段御役向よりも重々被仰聞就るは御書面は御請込被爲置時勢一

定之上は何と歎御沙汰可有之との御事に御座候

右之外近況京都より可仕御意候得共只今兵庫着船仕候處飛脚出足致候付右之廉々得御意如此御座候由端書に四五日前より於京都横濱之夷艦大方出帆浪華に襲來と申巷説有之江戸よりも格別不申來取とめ候事には無之候得共承り候まゝ之由

（此書は文久三年四月二十五日木戸孝九が安戸九郎兵衛山田宇右衛門山田亦介中村九郎天野謙吉等長藩政府の要路に贈りしものなり）

内

金十五兩

土州

岩神主一郎

橋本鐵猪

同三兩

木戸孝九文書卷三（文久三年四月）

「同」は原文に「と」とあり



同七兩貳步

但一人前一兩貳步宛

志道 聞多

清水 清太郎

山縣 九右衛門

湯川 庄藏

原田 良輔

有地 範輔

同拾兩

但紀淡へ姊小路卿内命を以爲探索被差越候に付五兩宛路料として拂

佐世 八拾郎

福原 乙之進

同三兩

手付兩人路用

同三分

宿

同二圓

小五郎借

内

三兩

志道聞多海軍聞合として俄に伏水より下坂被仰付候に付右路用として相渡置

七兩貳步

清水 清太郎



山縣九右衛門

湯川庄藏

原田良輔

有地範輔

三兩

右五人姉小路卿に御付添として被差下路料不底に付被立下候事

佐々木男也手付忠藏桂小五郎手付作之進え路料旁として壹兩貳歩宛被立下候

事

四兩貳歩と

二百四拾文

吉川様御上京に付京都近情申上度段土州吉村寅太郎久留米淵上

郁太郎世子君へ相願其通り被仰付候に付寺島忠三郎一同浪華へ罷下り御

待仕居候處路料不底無余義趣申出候間宿や坂田や拂右之辻及拂

方候事

○（此書は文久三年四月木戸孝允が長藩政府に報告したるものなり）

浪華御屋敷におゐて借受致し候金貳拾五兩之内

五兩宛

佐世八拾郎

福原乙之進

右姉小路卿攝海御巡見之節被召連直に紀淡海防等爲探索被差越候に付爲

路料相渡候事

拾五兩

土州藩

橋本鐵猪

岩神主一郎



右は姊小路卿被召連候外之人柄に折柄浪華へ下り居拜謁致し候處有志  
之ものに付佐世福原同様紀淡へ被差越候處路用不底之由に付彼御藩有志  
のものより右之辻拜借の義相願候に付無余義次第候間借渡被仰付候事

○ 覺

一金貳拾兩

右此度御内用有之下坂致し候處一つ書之辻入用有之候間於爰元暫時御取  
替可被下候追<sup>上</sup>歸京之上立相成候様可申込候已上

五月朔日

桂

小五郎花押

北條瀬兵衛殿

○

一筆致啓上候吉川監物様昨朔日伏水之驛御止宿今二日晝九ツ時比に嵯峨  
天龍寺被成御着候付京都詰居之稽古人數詰役人中爲御迎御門内罷出御着

之上御旅館罷出候處孰も被成御相對御待請萬端無御滞相濟候間旁之趣被  
聞召上候様奉存候  
右御注進爲可申上之如此御座候恐惶謹言

五月二日

桂

小五郎

村田次郎三郎

小幡彦七

（福原越後）

福 越 後 様

○

彌御壯榮御忠勤奉大賀候さては今日は是非に出立仕候心得に御坐候處兵  
庫御備場御引拂一件何分相運ひ兼一日々々と因循に打過其中攘夷期限も  
相成り候事故片時も早く御免に相成候上は御引受之諸侯に御渡方相濟不  
申<sup>不</sup>は自然萬一之節不圖も

（小幡は小幡彦七）

神州御瑕瑾と相成事も難計に付小幡も態々下坂之都合に相成候間今暫時

木戸孝元文書卷三（文久三年五月）

三百二十七



(北條は北條瀨兵衛)

見合候様北條も頻に申説候事に於弟も此義一定候得は大に安心仕候間一盡力仕候心得に御座候余り遅延に相成候間一筆申上置候爲其勿々頓首拜

五月二日

小五郎花押

(岩國様は吉川監物)  
(小田村文助)

尙々岩國様御上着に付御届書等之儀委細小田邸氏へ昨日一書差越置申候間御存分に可然御取計奉頼候拜

(村田次郎三郎)

次郎三郎様

彌御無事に御周旋一段之事御座候さては其御地も何歟騒々敷趣攘夷期限も今一兩日と相成り候事に付此應接に於時勢も何と歟先一定可致乍去先便にて承知致し候得は償金相渡候趣尙此段尾水二俟よりも關白殿下へ御届有之候と歟申事に御坐候所先達之償金之義は御聞届無之に付何時兵端相開候事歟も難計趣

朝廷へも言上に相成居列藩にも布告相成(中斷)

(志聞は志道間多)  
(野村は野村彌吉にて長藩士なり)  
(山尾は山尾庸三なり)

に可有之志聞野村も逐付東下と存候緩々送別も得致し不申遺憾此事に御坐候山尾へよろしく志聞も東下に相成候は、吳々可然御傳言可被下候横上船は甚六つヶ敷歟と掛念致し居候小銃其外武器はいか、哉御心配と存候定十分を買得は六つヶ敷事と考申候尤成丈御配意申迄も無之候五百挺之ミチーは屹度約束致し候事に付彼よりも是非相渡候事と存候早々御受取有之度祈候先は爲其勿々頓首不一

五月七日

小五郎

尙々御見込一定候は、早々御西上待入申候必々々々御因循無之片時も速に斷然と御發足肝要に御坐候屈指相待居申候戸倉豊太馬鹿なれども要用之道具故自然江戸にふらつき居候は、早々上京致し候様御説得可被致候もしも江戸に不居合とも村田なぞへ詫しよひ返し周旋相成候は、波多野へ被申談其取計らひ論定致し被置候様存候左候も速に御西

(村田は村田次郎三郎なり)



上肝要に御坐候必々も相待居申候以上

(此書は文久三年に木戸孝元が村田藏六に贈りしものなり)

一筆致啓達候然は此度久留米藩姦黨大に跋扈致し眞木和泉其外正儀之士二十八人嚴重に令禁錮世間秘し候而盡く死罪に所し候姦計をたくみ國中不一方騷擾實に安危之境に付有志之士三人竊に脱走致し一昨五日之夜上着昨朝罷越候而右之趣申陳血泣に不堪候何分にも御當家の御縋り申上候に付速に御救助被成下候様依願仕候處

御兩殿様御歸國中之御事に付如何とも致し方無之候得共現に眞木和泉等

義は昨八月二日

御當家の被

仰出候

勅諭に御赦宥相成候面々之處未一年も不經姦吏之爲め非命に斃れ候は第一

(檜崎善兵衛は長藩士なり)

勅諭之御旨趣も徹底不仕義に付乍承片時も難默止次第に候間清水清太郎寺島忠三郎三條卿の罷出委細申上置候處同夕傳奏野々宮卿より御呼出に付檜崎善兵衛罷出候處姊小路卿におゐて御達之趣有之候との事に付御彼方は罷出候處早速御對顔被爲在別紙

(有馬中務大輔慶頼)

御沙汰御渡相成尙又御本文之趣至急迫之儀に付宰相様精々御周旋に早々御運ひ相成候様にと重疊御口演にても被仰達候次第に御座候間御沙汰書拜見被爲遊候上は屹度御直翰を以御使者被差越中務大輔様に拜謁申上候上委細御直に申上候様被仰付候は、御沙汰之御旨趣徹底可仕に付何分右之次第に付るは於

(山縣九右衛門杉山松助は皆長藩士なり)

朝廷も御役向方御掛慮被爲成三條卿より佐々木男也被招呼御差圖被爲成候に付小五郎天龍寺の罷出別紙之趣監物様及御聞山縣九右衛門杉山松輔被差越申候此段彈正殿の被仰上可被下候爲其如此御座候恐惶謹言

五月七日

桂 小五郎



村田次郎三郎

尙々現場之趣久藩人より飛脚良輔も承り及び居候事に付御直に御承知可被下候尙又彼藩有志之者より滞京之者へ差越候書翰等も此御飛脚間に合申候は、探索仕候を差送り可申候以上

○ 穴戸九郎兵衛様

山田宇右衛門様

山田 亦介様

中村 九郎様

天野 謙吉様

中村文右衛門様

秋村 十藏様

中村 誠一様

○

御用達之町人とは乍申上京之せつまで御當地之御 役中始終御心配被成候段いかにも面倒なれ事に、嘸々御不平と奉想像候昨夕今日別條無之候間御まぢも不仕歸宿仕候爲其勿々頓首拜

五月十二

木 圭

○ 邨 田 様拜呈主

(村田次郎三郎)

各様御精勤之御事奉珍重候陳々此度之御一條には不容易御次第乍去御一同様確乎不可拔之御元氣乍陰相伺奉感佩候弊藩之者追々登門得拜眉難有御正談之程舉る奉感伏候借此一人水府御家中に、當時御屋敷詰に相成居私同志之儀故追々尊藩之御模様相談候處深く奉感伏是非御有志之御方に添書仕吳候様被相頼候付此段相願申候間御面會相願度奉存候其中私にも登門可申上心得に罷在申候草々九拜

五月十六日

桂 小五郎



（三浦捨藏等四名皆對州藩の人なり）

三浦捨藏様

吉村多津之介様

幾度判兵衛様

中庭彌七郎様拜呈

○

拜啓昨夕已來不圖快雨御同慶奉存候さては獻金懇願之趣委細先日登殿言上仕置候處速に御詮議被爲在候との御様子奉窺候處御多事之御時節に付元より御猶餘被爲在候御事とは毛頭不奉存候得ども如御承知切迫之折柄に付懇願之通速に被遂御許容候御事に御座候得ば無此上宰相父子におゐても難有義に奉存候右申上候通委細は御直に言上仕置候得共必竟宰相父子におゐては土地相應朝貢之道相立

天恩萬分之一奉報度義從來之志願に御座候處乍遺憾十分之儀は難有相調候得ども寸志之處被遂

御許容

朝貢之道相立候一端とも相成候得は宰相父子は不及申家來之ものまでも誠に以難有儀奉存候何れ爾他奉伺度義も御坐候付明日は此窺旁私共中遂登

殿候心得に罷居申候得ども何卒右之次第に付

尊公様よりも御窺被下微意徹上早々被遂

御許容候様偏に奉願候先は右御願旁奉呈候勿々頓首九拜

五月廿日

桂 小五郎

丹羽筑前介様

尙々本文之趣速に被遂

御許容候様精々奉願上候申上兼候義に御坐候得共爲其浪華出張之もの

本戸孝九文書卷三（文久三年五月）

三百三十五

（丹羽筑前介は三條家の雜掌なり）



より宰相父子之微志を受け節々申越候尙又先達一往奉歎願其節懇願  
之書面をも御納被 仰付候付は元より難有義にて當分之處たとへ御  
猶餘被 仰付候とも何分之御沙汰を蒙り候迄は現物用意相扣居候事に  
付懇願之通り被 仰付候得は實に無此上義に奉存候乍失敬御推察被成  
下何卒迅速被遂  
御許容候様奉願候且又被遂  
御許容候上は献上仕候次第等  
尊公様御窺被下候万端可然御差圖奉願候不顧不敬存分に申上候間御  
取捨被成下可然御容赦奉願候爲其頓首拜

高杉要人

（高杉要人  
天野虎之助  
皆長藩士な  
り）

右天野虎之祐氣分相に付代りとして今日堺町御門に出勤被仰付候事  
別紙之通御沙汰相成候早々只今御出勤可被成候以上

五月廿四日

桂 小五郎

高杉要人様

今晚より浪華に御用に付下り申候留守御氣被爲付可被下候申す迄も無之  
候へ共確乎たる志瓦解致候るま今度は實に不相濟候間必々御勉強專一に  
存候出國之時の志御守夜白御勉強幾往にも肝要に存候爲其勿々頓首

五月念五

木 圭

ワダ 様御直

（長藩醫和  
田文景なる  
へし）

内野 老兄御直拆

木 圭

尙々別封え差上げ置申候間爰元弊邸へ御潜伏せせつ此北條と申もの  
へ御持參被成候は、いか様とも取計らひ可申上候拜

昨日え勿卒失敬申上候實に逐々爲御國家御苦心御盡力奉感服候尙此余之

木戸孝元文書卷三（文久三年五月）

三百三十七

（内野某は  
對州藩の人  
なり）  
（北條瀨兵  
衛）



○ 對井氏は  
對州藩勝  
井五郎な

處申上るも失禮至極に御座候得共勝井氏之御所致公正之上も公正に無御座るゝ乍恐將來御國家御平定萬々無覺束事と奉存候諸事屹度御忠告奉祈念候其中時下御自愛第一に奉存候勿々頓首拜

五月念五

○

御手紙奉拜誦候明朝

君上御登城は定る御懇之趣と奉存候御互に無此上奉恐悅候さて弟も是非明早朝は下坂不仕候は不相叶急用有之今晚一力亭へ罷越候間明早朝駕に伏水まで罷越候積り候故萬々一無余儀御用向に御座候は、双林寺御近處に拜鳳可仕兔に角兩三中には奉拜鳳候事故つまりが其節に如何哉乍恐

君上へも可然御取成奉願上候頓首九拜

廿五日夜

二 大兄

木 圭

○

○ 二大兄は  
對州藩大島  
友之九極  
口兼之亮な  
○ 石津新藏  
は長藩士な  
○ 北條瀨兵  
衛  
○ 吉川監物

彌御壯榮に御忠勤奉賀候弟も今夕七ツ過着坂仕候處別紙之人數石津新藏合にて北條は致相談滯宿致させ置候處昨日之都合に病氣等之節懸替にも差岡有之候由に付右引當として右之通取計らひ申候間監物様より仰上都合能御取計可被下候委曲は歸京之可申上候爲其勿々頓首拜

五月廿六日

小五郎

次郎三郎様

○

櫻井陽三

○ 村田次郎  
三郎

右御用有之兵庫被差越候事

別紙之通御沙汰相成候可被成御承知候以上

五月廿六日

木戸孝尤文書卷三 (文久三年五月)

三百三十九

○ 櫻井陽三  
は長藩士な



櫻井陽三様

村田次郎三郎  
桂 小五郎

○字下げ  
は割書な

今日も逆風にて御入り被成と奉察候つまり御陸行可然と奉存候路用片昨夜は匆卒に御別れを告暫時とは乍申こゝろ残り申候何分にも御道中別路丈且々御座候は、御歸路之節は委細於御國被仰込御落手可被成候弟御自愛御歸國之上御用相濟候は、早々御上京奉待候

が申候と被仰一時一刻も急げば金は入り申候間御用捨有之候は運ひ不申候間爲念申上候

一 一橋東下之上俗論騰起攘夷斷然御斷當職御免被願候始末逐一是のみ態々御國に報知可致之處此度老兄東御報知被成候都合故別段に此儀御用狀にて申越す候間弟より此儀は委細老兄に御授け仕候都合に關東之有様得と諸有司へ御晰可被下候

(吉川監物)

吉川様御參

内之せつ 御役向より此度一橋御斷申出候に付大樹公去留如何と仰付候可然哉との御下問之せつ

大樹公一旦小田原まで罷歸

勅旨貫徹致し候様致所置候重上洛可仕と被願候由に御聞取被成候高瀬邸におゐて清水清太郎始弟等まで被仰聞御評議有之候處其明々廿二日學習院へ御出に東久世錦小路三條西三卿へ御逢に御承知被成候には大樹公小田原まで罷歸致所置候其上江戸罷歸候内言上被致候由重上洛と申所東歸と申事と吉川様御聞達被成候由此段後に村田被仰聞候よし於御國もし日載を見不審致し候は、此趣得と御説可被下候様奉願候事

(村田次郎三郎)

昨廿六日に  
は暮より達  
し有之候事  
に存候委細  
御晰仕置候  
通

一 對州一條は昨日委細申上候趣麻翁へ先得と御晰可被下候前途不可見之折柄一時之快に乗じ御國有志のものむやみに出國仕候は御國之脈



は丸々抜け候も他日一變に應じ候事も出来兼候得は終天之遺憾に付此儀は幾應にも實着に無之は不相濟其上昨今之形勢に於ては内亂旦夕も難計割據申迄も無之に付飽迄先國本を相固め候儀肝要に御坐候國本相堅り不申は此往々眞の勤

(麻田公輔)

王は出来不申依る御國は先當分脇目をふらず國本相堅め此上も方向を相付き候儀御所致第一と奉存候此邊老兄得と御合にて麻翁へ御嘶可被下候昨日ちよと御嘶仕候通萬一對州も於内輪朋黨相立名々功名を争ひ候都合と相成候は外處に於ては無之内輪之分裂は必然と被考申候三萬石を得候とも右之姿どもに相成候は實に浩歎之次第に御坐候  
右之外少々御嘶し殘し置候事も有之候得とも格別要務に無之此二ヶ條は得と御合可被下候尤前の一條は早速急飛を以可報之處意味不通に於て却る議を起候のみに於て無之候間老兄を以始末末報知仕候都合此段厚く御含み可被遣候其のみ御用狀一本可差出之處認落し候故何分にも老兄御口

頭に有體之處都合能必諸有司に御嘶可被下候拜

八拾郎老兄

允

(佐世八十郎)

(此書は月日なきも五月二十七日なるへし)

(清水清太郎)

不取敢禿筆を奉呈候此度御用狀披見仕候中清水氏御國召之義申來居候然處對州に今般御沙汰有之候一條に付は傳言不仕る不相成次第も有之御飛脚のみに於ては些不足に相考居候處幸之義に付是非清氏に持歸り相成候義可然と奉存候間左様御合奉願候先は爲其勿々頓首九拜

五月念九

尙々出足之節被仰聞候一條は委細歸京之上可申上候浪華も昨今炎熱に  
ま實に當惑仕申候佐寺兩子にも乍失敬可然御願申候彼一人會藩を以被  
召捕候よし先安心仕候天誅可恐々々

松屋老翁御内披

松菊生拜

(村田次郎三郎)

木戸孝允文書卷三 (文久三年五月)

三百四十三



彌御壯榮に御忠勤奉大賀候御國より之飛脚到着候乍失敬御先へ披見仕候  
明日は乗船可仕と存居申候間上着之上萬御相談可申上候金二千仕送り相  
成當分御都合は相叶候事と奉存候一萬と明日取歸り申候先は爲其勿々頓  
首九拜

五月念七

（吉川監物）

尙々弟に當り候御用狀此貳通も御落手置可被下候吉川様御届も少々勘  
考御國と相違歟と被相考申候拜

（村田次郎  
三郎）

次郎三郎様

小五郎

（益田彈正）

一筆致啓達候清水清太郎事御用有之早々出足御國可被差下との御事候條  
可被成其御沙汰候此段各様迄可申進由彈正殿被申付如此御座候恐惶謹言

桂 小五郎

前田孫右衛門様

中村 九郎様

謹啓まづもつて

御壯榮御忠勤恐賀奉り候さて先頃は御上京なされ候ふ御様子この節は伺  
公を遂げず失敬の段御容赦偏に願ひ上げ奉り候時に對藩の事かね々々御  
聞きに入れ候ふ一條二十六日に願ひの如く御達しこれあり候ふやの御様  
子にて私二十五の夜京都出足の折かの藩大島より承知仕り下坂の上は直  
に同人よりこの段御聞きに入れくれ候ふやうあい頼まれ候ふ處下坂當分  
彼是取り紛れ登門仕るをえず今日參上申し上げ候ふ處昨夜より兵庫港へ  
向け御發のよしその中私も歸京仕らすてはあい叶はず遺憾千萬に存じ奉  
り候いづれ大島も遠からず拜鳳奉り候ふて委細の儀は言上仕るべく候と  
にかくこのゆく々々の形勢また容易にこれなくその上京都過日の一大變

（大島は  
大友之允に  
對州藩の  
人なり）



浩歎の次第に御座候外寇より内地紛亂致し候うて  
神州の禍害この上なく何分にも迅速御國是御一定仰ぎ奉る處に御座候事  
實巨細の儀筆頭に盡き申さすその擱筆の爲勿々頓首百拜

五月念九

小倉の儀申し出で候ふ事實に心外至極に御座候へども自然と夷狄をひ  
く形さま々々あひ窺はれ國中の憤懣容易ならずこれなりにて打ち流し  
候ては内地四分五裂決して再び收むべからざる形勢に立ち至り實に  
神州御一大事と存じ奉りやむを忍す本文申し陳べ候ふ通りかねて  
御宸斷あられ候ふにつき御時を建言し奉りもとより宰相父子においては  
昨年來ありがたくも  
寵遇を蒙り奉りこゝに於いて因循にうち過ぎ候ては誠にもつて恐れ入り  
奉り候ふ儀につき只々自分至難に當つて  
天恩萬一に酬い奉り候ふ心得にてこゝにおよび必竟は天下一致にこれな

らてはあひ濟まざる儀と存じ詰め居り候ふ處やむを得ず今度建言仕り候  
事小倉に起り候ふ事につき是非なくこゝに小倉を申し出ですては元來の  
趣意あひ分りがたくやむを忍ざる次第につき御諒察願ひ奉り候ふ事

(此書は木戸孝允が勝麟太郎に贈りたるものなり)

(兩氏は對  
州藩樋口謙  
之亮多田  
莊藏なるへ  
し)

拜啓昨夕は大に失敬申上候さて其節御兩氏御下坂に付御面會被成下候段  
被仰聞承知仕候處無余儀今日去是非とも上京不仕は不相叶義出來仕候  
に付追付乗船可仕と奉存候何れ御兩氏も其中御用向被爲濟候て御歸京被  
成候御事に可有御座候間委曲其節相窺可申と奉存候間此段乍慮外從  
老臺よろしく被仰入被下候様奉願候先去此趣可然御取成奉願度呈禿筆候  
其中京都之御用事御座候は、必無御容赦被仰聞候様奉存候爲其勿々頓首  
九拜

六月二日

木戸孝允文書卷三 (文久三年六月)



(北條瀨兵衛)

木戸孝九文書卷三 (文久三年五月)

三百四十八

尙々昨夕留へ北瀨罷越候よし其節兼御相談之儀相調候歟之口氣に申置候よし昨夜は格別に相嘶不申追付面會可仕と存申候間左候は、委細相分り候事と被存申候其内御序ども御座候は、鳥渡御光來被成下候は、無此上難有奉存候勿々拜

桂 小五郎

大島友之允様御直拆

先達

(益田彈正)

朝廷に御懇願相成居候獻金一條に付三條殿より御呼出有之候間小五郎罷出候處別紙之通被仰出候間此段彈正殿被仰上御兩殿被及御聞候様にと存候由

御面書致承知御當役方申達及御聞候恐惶謹言

六月廿九日

(此書は文久三年五月二十五日木戸孝九村田次郎三郎が長藩政府員に贈りたるものなり)

一筆致啓達候然は過る廿日之夜姉小路少將殿御退出掛於朔平門外及狼籍候もの有之誠に未曾有之大變爲之洛中も不一方騷擾奉對 天朝恐縮之至に不堪奉存候御警衛之義等も別箋之通遂に被仰出候右に付近況報知旁佐世八拾郎被差返候間委曲同人より御承知可被下候

一 時勢切迫何時蝥蝥之下及紛亂候も難計萬一之節京邸居合之ものは元より遂に御當家に御依頼仕罷出居候有志之面々も舉る 天朝奉守衛候義は當然之處御手當之武器類等更に無之此儘難閑候間江戸表被殘置四小隊分之器械一小隊分丈々彼地被引除置残り三小隊分丈け不殘被差登候義申越候

一 御所御近火之節堺町御門へ人數被差出候義先達御達有之候に付火消道具取調へ見候處御滯京中少は新調取繕等も被仰付候得ども不足之物

木戸孝九文書卷三 (文久三年五月)

三百四十九



多く不殘新調被仰付候は餘程之御物入に付皮羽織檢印齋口法被其外小々之物は又江戸表御有合之分彼地三丁火消一備分引除置其餘は不殘送り方之儀申越候但右に付必用之物々取調へ新調損じ取繕等之致沙汰候事

一 前條御警衛向等之儀に付御中間之もの多人數御入用之處爰許甚御無人に御備場詰足輕已下之もの追々御引拂に御國被差下候様子に付人物相撰貳拾人呼寄せ之儀申越候處尙不足に候間今拾五人又々申越候孰も暫時之沙汰に申越置候に付人物御撰らび二小隊分早々被差登候様御詮義可被下候

一 彈正殿家來小國融藏事横濱事情探索爰元より直様江戸被差下候委細は日載に御承知可被下候

右之趣彈正殿被仰上御都合能御取計らひ可被下候其外近情八拾郎に申合置候間同人よりは又一々御承知可被下候爲其如此御座候 恐惶謹言

五月廿五日

桂

小五郎

孝九花押

村田次郎三郎

忠之花押

宍戸九郎兵衛様

山田宇右衛門様

山田 亦 介様

中村 九 郎様

天野 謙 吉様

中邨文右衛門様

秋 邨 十 藏様

中村 誠 一様

(御面書云々は長藩政府員の回答に於て麻田公輔の自筆なり)

御面書別箋旁致承知御當役方申達御地之形勢佐世八拾郎報知之趣をも被及御聽候朔平門外之大變實に神州之大變御同様不堪浩歎之至候御警衛其外於各様御盡力不一方御事と奉察候 恐惶謹言



七月十二日

中村 誠一 保 (花押)  
 秋村 十藏 達 (花押)  
 中村文右衛門 祇 (花押)  
 天野 謙吉 華 (花押)  
 山田 亦介 公章 (花押)  
 山田宇右衛門 頼 (花押)  
 麻田 兵輔 包 (花押)

村田次郎三郎様  
桂 小五郎様

(笠原半九郎は長藩士なり)

笠原半九郎事兵庫より御國歸り掛け自力を以て劔術修業として五畿内中國路百日之御暇如願御聞届相成爰元罷登候處堺町御固人数御無人に付先被差留御扶持方上等稽古料等被立下候段致沙汰候尙又高杉要人事氣分相に

付

若殿様御供被差除置候處此度致快氣候付是亦御無人に付當分被差留候段致沙汰候間旁之趣被成御承知彈正殿被仰上可被下候由

御面書之通致承知彈正殿申達候恐惶謹言

(此書は文久三年六月三日木戸孝尤が村田次郎三郎と共に尖戸九郎兵衛等に贈りたるものなり)

亂筆御推覽奉願上候拜

朶雲拜見仕候彌御壯榮御起居奉賀候御地も何歟諸事不決に而東西之形勢大に相違仕候よし必竟爲

(志道聞多)

(春輔は伊藤俊輔なり)

神州浩歎之次第に御坐候さては志道始其外十二日に宿志通り遠遊致し候由彼是御配慮と奉察候春輔も同行に誘れ候よし彼は兎も角も一度は歸京致し候都合に而已に先便申越候にも五月一日二日頃には出足致しかけ居候處弟より一橋公歸府上之様子を承り候而西上致し候様申遣候のみに而



延引致し候趣之所よき機會と存候歟同遊致し候歸京致し候得は一大益に相成候事も折角有之候折柄に随分残念に存候得ども今更無是非他日奏一功候得ば於弟本懐至極に存候弟等も實に遠遊は宿志にて終にぐづく不相果此余自然よき機會有之候得は斷然拔足度と心掛居申候其節は何もよろしく願候事も可有之歟と存候一日百變之折柄一寸先は暗夜なることちにて天下之形勢にては識者もいかなる定見有之候歟とも難被計其中其地之情實も相分り候事も御坐候は、被仰越被遣候様奉願上候勿々頓首九拜

六月四日

尙々時下御自愛第一に存候弟も浪華より昨夜歸り候位の事に得と御様子も灘二郎其外よりも承知不仕候梅吉へ三圓御渡被成候と歟鳥渡灘等え承り候處道中に落馬かごなそにのり少々遣込候歟に相聞申候委細は後便得と取糺可申上候頓首

（村田藏六）

藏六先生御内拆

允

（下文は村田藏六自筆にして本文の裏面に書す）

桂書狀十一日落手

國規一件十一日開處

大坂臺場一件十三日

長劔金子 出し十四日

取かへ十二日

○

去月廿九日夜坊城家より御呼出に付河野尙人差出候處伊勢之人大路陸奥事御不審之趣有之松平安藝守様被仰付御召捕に相成候處此御方の御預被仰付候之旨御達有之候段承歸候然處當時御兩殿様御在國中に爰元詰居も至る御無人之上堺町御警衛尙ほ昨夕錦小路様橋本様御警衛をも被仰付亦々右御預人被仰付候は中々人数引足り不申至る御差湊に付何卒外様の御振替之御詮議ともは被仰付間敷哉御内々申入尙御役方にも段々



御斷之義申入候處御尤之御事には候得共御在京之御方は夫々御手當被仰付置御在國之御方は數軒有之候得共御家に寄り候はケ様大事之人柄御預相成兼候付乍御迷惑御預被仰付候と之御事御入割之趣被仰聞無余義次第に付御請仕候處翌晦日錦小路様橋本様御警衛をは被差除候段御達有之候右に付御預人入所御屋舖内明固屋に板圍仕調申付相調候上過る二日物頭御雇山縣九右衛門其外藝州様罷越請取無別條連歸申候途中固め人數付其外之義は日載に相見候に付不具候旁之趣彈正殿被仰上可被下候由御面書之通承知鞞負殿申達候以上

(山縣九右衛門は長藩士なり)

六月廿七日

(此書は文久三年六月四日木戸孝元村田次郎三郎が尖戸九郎兵衛等政府員に贈りたるものなり)

先月廿九日江戸立御國通之飛脚一昨三日之夜京都立寄遠藤多一郎波多野藤兵衛より差越候御用狀致披見候處先月十日於馬關掃攘及れ候米船横濱

罷越佛軍艦を誘馬關に向け出帆致候趣於横濱風説江戸

御館に及注進候段申越彼之虚喝眞偽難相計候得共必竟

神州一體に關係致し就るは久坂玄瑞被差登候御用向之御旨趣彌以片時も

速に徹上不仕るは不相成且

儲公四月十六日御參

内被遊候節降

勅御懇願被爲成候

御旨趣も御同様之御事に速に

勅旨偏く貫通不仕るは不容易御儀付引續き一同御役向方にも節々罷出情

實精々申上昨夜小倉には格別

御沙汰有之今日列藩にも降

勅有之候御様子に被奉窺候尙京都之近情も兎角奉掛念候儀のみ有之候に

付右御一決次第玄瑞早々被差返可申候得共其中爲可得御意如此御座候由



○態与不及返答留置候事

(此書は文久三年六月六日木戸孝尤村田次郎三郎が長藩政府員に贈りたるものなり)

昨六日之夜別紙坊城殿より御達有之列藩にも同夜同様被仰出候由小倉には一昨五日之夜別段沙汰有之候由に御座候右に付今日仕廻次第久坂玄瑞被差返申候京都近情も何分不穩事のみ實に奉掛念候委細は同人より御承知可被下候先は爲可得御意如斯御座候由端書に別段同人の申合候廉々も有之儀に付委曲同人より御承知被下早々御答可被下候由

○此分態与不及返答留置候事

(此書は文久三年六月七日木戸孝尤が村田次郎三郎と共に麻田公輔等藩政府の要路に報告せるものなり)

今酉の刻坊城殿より御呼出有之候に付村田次郎三郎罷出候處別紙御達有之其節小笠原圖書頭上京一條に付別番御内々之

御沙汰書をも御渡有之候就るは監物様御名代之御儀に付委細申上 思召之邊も得と相伺可得御意答之處於

朝廷御差急之御儀に付

御沙汰書兩通とも不取敢久坂玄瑞出足致し候付守護致し候被差返候且又今夕刻佐々木男也三條殿の罷出候處今日御達之趣御直被仰聞攘夷一條に付無余儀

御父子様速急御上京相成兼候は、家老之中同勢引連先上京致し候様被仰聞候由委細は得と相伺束可御意候間此段彈正殿被仰上  
御兩殿様被及

御聞候様にと存候爲其如此御座候由端書に肥後因州備前阿州仙臺諸侯にも御同様被爲召御達有之候由に御座候由

御面書御端書別番旁致承知久坂玄瑞より報知之趣委曲彈正殿申達  
御兩殿様被及



御聽候恐惶謹言

七月六日

○ (此書は文久三年六月七日木戸孝九村田次郎三郎が尖戸九郎兵衛山田宇右衛門等政府員に贈りたるものなり)

○ (小國融藏は長藩老臣益田正の家臣なり) (大田市之進は長藩士なり)

小國融藏事過る二日江戸出足今日上着致し關東之事情承知致し候處姦吏之所置誠以不容易儀に其儘難差置候間清水清太郎佐々木男也同道三條卿に罷出委細及言上候然處今朝中山忠光様御事大田市之進外以上十七人被召連高瀬邸に御着被爲成候付御様子相伺候處姉小路卿御災難之趣相聞已に輦轂之下及紛亂候様相響き不取敢御上京被爲成候由右に付馬關詰居有志之面々推而上京にも相成候様子に御坐候處融藏より承知致し候處に亦は佛夷は已に馬關に向け出帆米夷も上海に罷居候軍艦に促し候趣實に不容易形勢に馬關之御實備御急務に候處有志之向き舉而上京に相成候亦は空虛之地と相成且忠光様にも關東様子御承知被爲成御氣付も有之候

に付杉山松助下坂爲致追々坂着之上は關東之事情逐一申聞せ間に歸國致し候様可申説段相合め申候

京都も小笠原圖書頭罷登候付於朝廷も御掛念被爲遊候御義も有之昨夜列藩にも御内沙汰被仰出候位之御義に御坐候得共何分御國表之儀も差迫候事に付手を盡し候上も手を盡し不申亦不相叶其中自然輦轂之下及騷擾候節は詰居之面々必然盡力其節を遂候之外手段有之間敷候委細は融藏より御承知可被下候爲其如此御坐候由

亥六月廿四日馬關に廻し

○ (此書は文久三年六月八日木戸孝九村田次郎三郎より尖戸九郎兵衛等藩政府員に贈りたるものなり)

(亥六月二十三日云々麻田公の加筆なり)

真木和泉昨八日上着致候に付不取敢先御山善兵衛方に引受申候追々御役向にも夜白となく御用有之候節は可罷出義に可有之候間其中便利之處相撰候亦仕向け可致と存候且又先達一橋東下攘夷之義御斷被申出當職を



も御免被相願候節大樹には如願東下被仰出早々出足速に 勅旨貫徹致候様屹度被仰付候義於于下も有志之間願候處にて於御役向も姉小路三條西卿方も其御議談被爲在候御様子に内々被相窺監物様にも御同見殿下より御下問之節も其御主意に被仰上候處今度小笠原圖書西上之一件真に論説之次第に於は實に不容易儀に候處尙又逐々關東之風聞相聞候處に於は姦吏之所行不一方趣に被察候に付此儘大樹東下に於は未來之勢不可計儀に付先暫滯京可然との義に於昨今追々御役向にも有志之藩よりは建言も有之候折柄真木も上着に於滯京之義同談に候間不取敢昨夜殿下并三條卿にも言上致し候得共最早機會後れ候も今朝一先下坂に相成申候何分にも乍恐御根本之所御大事に付真木も不絶御役向等の差出し専ら力を盡させ候様周旋可仕と存候小笠原圖書も從朝廷官位御取上に相成候於幕も圖書身上は大坂城代に相預け糺明之上何分之處置可仕段言上仕候由此往臨機之御處置不被仰出は不相叶御儀も可被爲在之處追々御役向方出入仕御坐候由

時々建言仕候面々にも格別人物も無之様被相察候處此度真木上京に付は一端之御益にも相成候歟に被伺申候人となり未得と承知は不致候得共兎に角有志間之人望も相歸し居候様子に相見申候先は右爲可得御意如此御坐候由

亥六月廿四日馬關に廻之

（此書は文久三年六月九日木戸孝九村田次郎三郎より長藩政府員に贈りたるものなり）

（亥六月二十三日云々麻田公輔の加筆なり）

小國融藏事横濱表事情御注進として昨日致上着候處不容易趣に付早々出足御國被差下等に於別紙御用狀相認候得共爰元へも少々相滯事情致探索御注進仕度段申出無余義次第に付少々滯留被仰付候右に付江戸より付添に差下候打廻り作助へ御用狀取下りの義申付今日出足差下申候間左様御承知彈正殿へ被仰上可被下候由  
御面書之通致承知彈正殿申達候以上



六月廿六日

尙々作助事無別條致歸着候以上

○ (此書は文久三年六月九日木戸孝九村田次郎三郎より長藩政府員に贈りたるものなり)

一筆致啓達候過る朔日於馬關及戰爭候次第幕府の御届之儀御國より申來候に付別紙御届書相調差越申候間於其元御老中様の御持參公用人迄差出候様にと存候尤御持參之節貴様御名前日限御書入上包にも御名前御書入可被成候左候に御届相濟候上御老中様御名前公用人名前日限等委細被仰越可被下候爲右如此御座候  
端書に貴様御間等にて御持參不被成節は檢丈衆被差出候も可然与此段御心得迄得御意候

○ (此書は文久三年六月十二日木戸孝九村田次郎三郎より北條瀨兵衛に贈りたるものなり)

○ (麻翁は麻田公輔)

大概是先刻申上候通に其他の儀は委細御承知被爲在候次第に御座候御歸國之上は乍慮外弟頼に歸省不仕は不相濟候處逐々御嘶仕候通手を着け置候事半途に相成居不得止今日まで延引仕候尤此度之事一決之上は是非一往は早々罷歸り申候に付此段麻翁へもよろしく御致聲上之處可然奉願上候且又此羽織破れものにも失敬に御座候得共不苦候は、御用可被遣候道中別に御自愛申上も疎に御座候頓首拜

十三

小田 邨 様御内披

木 圭

○ (小田村文助)

過刻得と御談仕候通有かた迷惑に思起せは實に残念至極元より御疎は無之候得共精々御盡力奉願候長州の周旋故と申説自然相立候は乍恐朝廷御威光を奉汚候は勿論未來の所置まで索然致す間敷歟と深く痛心仕候幾應にも厚く御含の上精々御周旋御盡力奉仰候先は爲其勿々頓首九拜

木戸孝九文書卷三 (文久三年六月)

三百六十五



六月十五

尙々ひの論は必御論破可被成候雜掌論へ流れ居候得は所詮何事も難貫候付決る御用捨無之義御肝要に奉存候以上

寺島忠三郎様内密

桂 小五郎

○ 過る十三日學習院より御呼出有之候に付清水清太郎罷出候處此度從朝廷別紙之通五藩の御沙汰被仰出候段豊岡東久世烏丸三卿御列座に被仰達候此段備前殿被仰上御兩殿様被及御聞候様にと存候爲其如斯御座候由

○ （此書は文久三年六月十六日木戸孝元村田次郎三郎が尖戸九郎兵衛等に報告したるものなり）

覺

益田彈正家來

大谷 樸助

右文學爲修行京都被差登中等之稽古被立下候事

右之通被仰付今日爰元出足其御地被差登候付月別御扶持方一人分金壹兩宛被立下候付可被成其御沙汰候此段各様迄申進候様越後殿被申付如斯御座候以上

六月十八日

小五郎

○ （前田孫右衛門）

孫右衛門様

姉小路卿御大變に付早速不取敢御報知可致之處大概之事實相糺し得御意不申るは於御國表も不容易御掛念に於外患切迫之折柄早急人數等被差登之義も可有之歟与存其節之夏實大體相糺し佐世八十郎被差歸候處島原藩



（遠藤太一  
郎波多野藤  
兵衛皆長藩  
士なり）

丸山太郎馬關通行之節申上候次第に深く被遊  
御掛念早速馬關出張之人數急に差登候御様子致承知候尤其後小笠原圖書  
上着に付不容易評説も有之候得共先月晦日今月八日江戸立之飛脚通行遠  
藤太一郎波多野藤兵衛御用状を以申越候趣に有は關東之形勢以之外之事  
に御國表彌切迫に付萬々一馬關空虛に致し有志之徒舉上京に相成氣  
脉相劣候有は不相濟義に付先得御意候通大坂表杉山松助差下し關東  
之事實申説罷登候面々直に引歸候様申授候處昨十三日湯佐小六其外十七  
人着坂小六栗栖與之榮熊兩人直に上京去留之義申出候付於爰元重及會  
議候處御國之議急務に候間被差返候方可然被相決し候に付今晚榮榎下坂  
着坂之面々一同等差返し小六事は暫時爰元被差留近情承知之上早速被差  
返可申候京都之形勢も至極奉掛念候得共實に御國表之義は差向不容易次  
第に付去る六日列藩にも降  
勅有之攘夷之儀重被

（前田孫右  
衛門周布政  
之助）

仰出候處列藩之勢中々無覺束十四五日之間列藩之勢判然たるへく候間於  
朝廷も一大御所致不被爲在有は不相叶御事と奉存候先は爲其如此御座候

六月十八日

小五郎

孫右衛門様  
政之助様

一筆致啓達候然去今般正親町少將殿以勅命被仰御國表御下向被爲成候間  
右御報知之爲め小田邨文輔被差返申候京都之近情委細同人に申含候付御  
承知可被下候先去爲其如此御座候恐惶謹言

六月十八日

桂 小五郎  
村田次郎三郎

宍戸九郎兵衛様  
山田宇右衛門様

木戸孝元文書卷三（文久三年六月）

三百六十九



山田 亦介様  
中村 九郎様  
天野 謙吉様  
秋村 十藏様  
中村 誠一様

一筆致啓達候今十九日

傳奏野宮家より御呼出に付次郎三郎罷出候處

御父子様御内

御登京之儀御猶豫被仰出候

勅書雜掌西池主水を以御渡相成候付平川波門之守護被仰付差越申候間此

段靱負殿之被仰上

御兩殿様被及

御聞候様にと存候恐惶謹言

六月十九日

桂 小五郎

村田次郎三郎

尙々攘夷期限之儀に付諸藩之御沙汰書爲御心得致御達置候と之御事  
に別紙一同御渡に相成候間是亦差越申候以上

宍戸九郎兵衛様

麻田 公 輔様

山田宇右衛門様

山田 亦 介様

中村九郎兵衛様

天野 謙 吉様

中村文右衛門様

秋村 十 藏様



中村 誠 一様

六月十九日

御用方様使なり

平川波門  
は長藩士なり

平川 波門

右急御用有之早々出足道中惣陸八日九日にして御國被差下候事

一波門事内添之趣有之百日之休息被仰付被下候様にと此内已來相願居

候得共御無人之事に付難被差免段相授置候處今日

御父子様御内御上京御猶豫之儀被仰出候

勅書御早使を以御國被差越候付右御用物守護として被差下候事

同 人

右御用相調夜中致出足候事

今朝は態々御傳言委細奉承知候さては何御用に候歟は不奉存候得共天下

之事に候得は去る六日之

勅諭徹下するとせざるとにて形勢相定り候事に付格別議論も無之故實は

御暇を頂戴仕度奉存候得共是非歸らずては都合よろしからず候は、至極

奉恐入候得共何卒手付八十江へ御一聲被仰聞被遣候様奉歎願候先は爲其

勿々頓首九拜

十九日

佐々木男  
也寺島忠三  
郎清水清太

尙々佐々木寺島兩氏は今朝清水氏一同米藩一條に付三條卿に登殿仕候

に付御用相濟候は、早速御屋敷に可罷出尤松葉屋まで一應申遣し置候

得ども 先生よりもちよと被遣置候方可然歟と奉存候頓首

村田次郎  
三郎

木 圭拜

一昨夜之朶雲昨夜拜誦仕候兩三日御疎濶に打過御なつかしく奉存候二老  
も下坂のよし先日弟兼る愚考之處は無腹臆申陳し然る上不合議に候得は